

Keio  
Research  
Center  
for  
the  
Liberal  
Arts

慶應義塾大学  
教養研究センター

2025 年度  
活動報告書

---

# 2025年度 活動報告書

---

慶應義塾大学教養研究センター  
Keio Research Center for the Liberal Arts



# は じ め に

慶應義塾大学教養研究センター所長 片山杜秀

教養研究センターは2002年7月にできました。以来、もう四半世紀近くが経っています。いったいなぜその時期に、教養を研究するセンターが作られねばならなかったのでしょうか？ 逆の方向から言えば、どうして2002年まではそういうセンターがなかったのでしょうか？ たまたまというわけではありませんまい。わざわざ作るのにはお金もかかる。人手もいる。誰かが情熱をもって周囲が理解を示さなければセンターなんてできますまい。やはり2002年なら2002年ならではの何らかのわけがあったのでしょうか。そろそろ当センターとしても自らの歴史を顧みるために、関係者の談話集などでも編纂してみても良い頃合いかもしれません。歴代の所長や副所長に「活動報告書」には残らぬようなそのときどきの「内幕、や「秘密、や「本音、を語っていただくとか。

いや、当センターの「活動報告書」は昔から、いわゆる官僚調の作文にはあまりなっていないかと思うので、毎年の「活動報告書」を読み込めば、改めて見えて来て胸に刻み直さねばならぬこともきっと多いでしょう。そうそう、『人は大切なことも忘れてしまうから』という本もありましたっけ。松竹大船撮影所が閉鎖されるというので、関係者に談話をとって1995年にまとめられた書籍でした。教養研究センターは今のところ閉鎖される予定はありませんし、慶應義塾大学あるかぎり続いていくかもしれないと思ってみたりもしておりますが、やはり大切なのは、なぜわざわざセンターが出来て続いているのかを、関わる者が不断に問い直し、存在意義を確かめ直していくことです。そうでないと何のためにやっているのかがすぐに分からなくなってしまう。人は来て往く。いろんな教職員が来往しているうちに、たった何年かで、なぜこんなことをしているのか、大本のところを忘れてしまうのです。その意味でたかが「活動報告書」、されど「活動報告書」なのです。新しいものに目を通して頂けるのもありがたいですが、「活動報告書」を読む醍醐味は過去の分に遡って読み比べて、過去のここを忘れたからこの年度はこうなってしまったのかと反省してみることにあるように思われます。



# 目 次

|             |   |
|-------------|---|
| はじめに        | 3 |
| 組織構成と事業計画   | 6 |
| 2025 年度事業報告 | 7 |
| 広報・発信       | 9 |

## I 研究関連プロジェクト

|                   |    |
|-------------------|----|
| 基盤研究・一般研究・特定研究    | 11 |
| 基盤研究              |    |
| 教養研究              | 12 |
| 教養連接研究 高大連携プロジェクト | 13 |
| 教養連接研究 文理連接プロジェクト | 15 |
| 研究成果公表            |    |
| 学会・ワークショップ等開催支援   | 16 |
| 研究交流              |    |
| 読書会推進企画「晴読雨読」     | 17 |
| 横山千晶教授 最終講義に寄せて   | 18 |

## II 教育開発関連プロジェクト

|                       |    |
|-----------------------|----|
| 1 設置科目                |    |
| 1-1 アカデミック・スキルズ       | 19 |
| 1-2 身体知               | 20 |
| 1-3 身体知・音楽            | 21 |
| 1-4 日吉学               | 22 |
| 1-5 ゲーム学              | 23 |
| 1-6 エンターテインメントビジネス論   | 24 |
| 1-7 金融リテラシー入門         | 25 |
| 2 実験授業                |    |
| 2-1 庄内セミナー            | 26 |
| 2-2 情報の教養学            | 28 |
| 2-3 みなさん mirai プロジェクト | 29 |
| 2-4 エンターテインメントビジネス特論  | 30 |
| 3 「学び場」プロジェクト         | 31 |

## III 交流・連携関連プロジェクト

|                   |    |
|-------------------|----|
| 1 日吉行事企画委員会（HAPP） | 32 |
| 2 日吉キャンパス公開講座     | 34 |
| 3 「創造力とコミュニティ」研究会 | 36 |

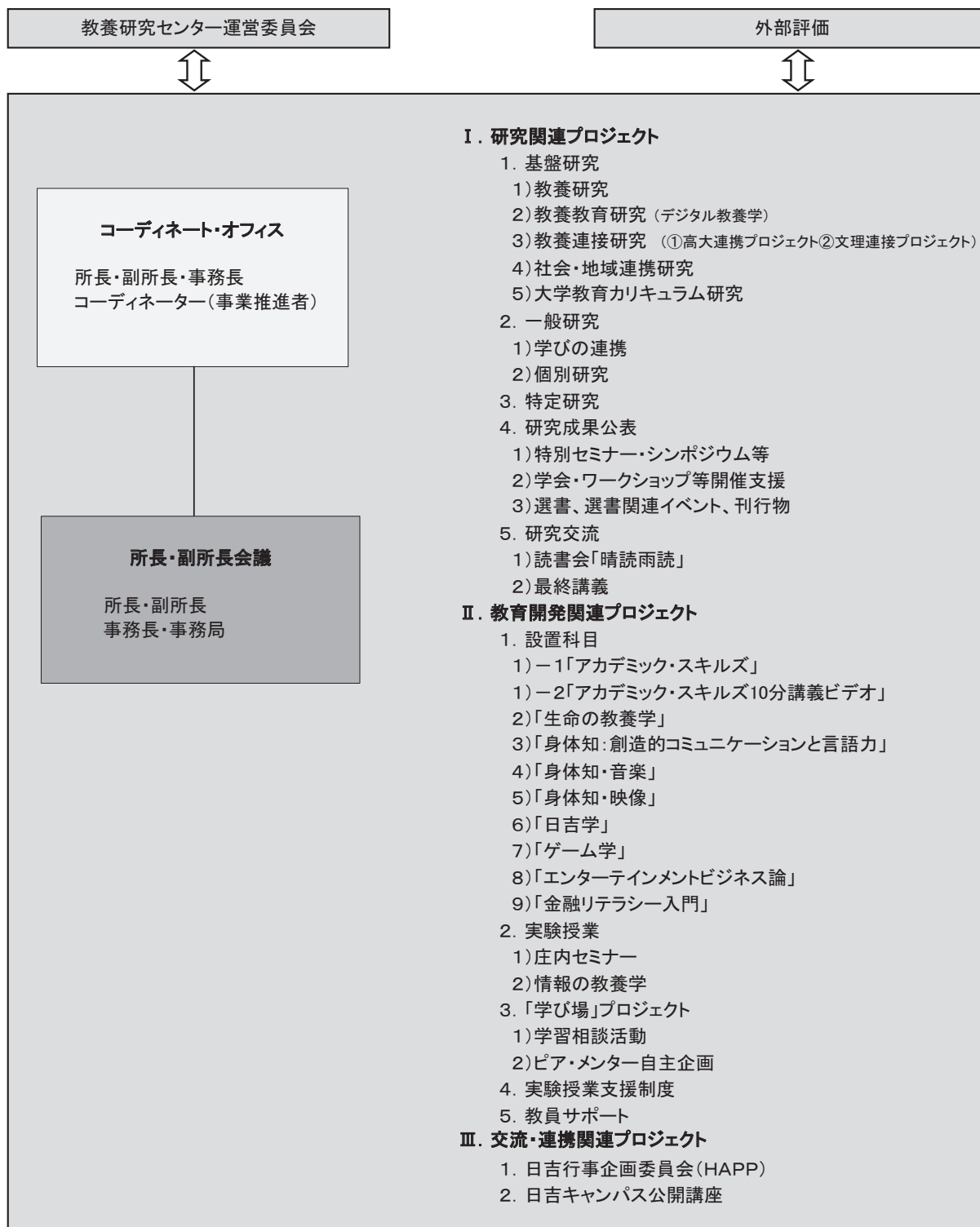
## 資料編

|                    |    |
|--------------------|----|
| 1 慶應義塾大学教養研究センター規程 | 38 |
|--------------------|----|

|   |                   |    |
|---|-------------------|----|
| 2 | 運営委員会委員           | 40 |
| 3 | 組織構成員             | 41 |
| 4 | 2025 年度の主な活動記録・予定 | 43 |

※本報告書では、各プロジェクトを便宜上3つのカテゴリーのいずれかに分類しました。  
※執筆者および本文中で言及されている方の所属・職位は授業、イベント等開催当時のものです。

## 教養研究センター組織構成と事業計画(2025年度)



コーディネート・オフィスは、運営委員会の付託を受けて教養研究センターの日常的な活動を執行する機関です。約20名のコーディネーターから構成されています。所長・副所長・事務スタッフに加え、教養研究センターの極めて多彩なプログラムを統括する代表や中心メンバー、学部や関連研究所からのメンバーが加わっています。教職一体での運営というのが教養研究センター設立からの理念ですが、これを実行しているのがコーディネート・オフィスです。

旧制の大学教育では、いわゆる教養課程が旧制高校ないし予科に割り振られ、その時代の慶應義塾大学でも予科の課程は日吉キャンパスを拠点にしていた。専門課程はつまり旧制では大学の予科でなく本科の担当であって、慶應ならば三田や四谷ということになる。戦後の新制の大学教育でもこの構図は受け継がれた。1、2年生は教養教育を、3、4年生は専門教育を受ける。学部によって違うところもあるが大きくはそういう仕掛けである。

でもこの仕掛けは次第に現実と合わなくなってゆく。旧制だと予科は3年、本科も3年で、合わせて6年が大学教育の原則的期間だった。新制ではそれが合わせて4年に縮む。新制では小学校から高校までは12年で、旧制だと尋常小学校から旧制中学までで11年だから、新制の大学に入るまでの就学期間は旧制のそれよりも余裕があるから、旧制から新制になって大学教育の年限が一概に短くなったとは言えないけれど、世の中の学問的知識の総量は、たとえば20世紀前半よりも21世紀後半以後の方が、理系でも文系でもだいぶん増大している。大卒者は、少なくともある専門領域については中卒者や高卒者よりも遥かに優っていて、アドヴァンテージが高く、エリートとして使い道があると、果たして本当に言えるのか。20世紀も後ろになればなるほど次第に危うくなっていった。つまり、4年制の大学では、20世紀後半以後の複雑化・高度化する一方の世の中へ、必ずしも有為な人材を送り出せなくなってきたのである。幾ら教育しても総合的に学ぶにはまだまだ足りないし、分野をよほど限っても先端にまでは追いつかなくなってきたということだ。

しかし同じ大学の4年でも使い方次第でまだ何とかなるのではないかな。4年のうち2年ずつが教養教育と専門教育と硬直的に割り振っていることがまず問題だ。そこで政府が行ったのが1991年の「大学設置基準の大綱化」であろう。旧制教育以来の教養と専門の均衡あるカリキュラムにもうこだわらずともよい。各大学の裁量に大きく任せる。極端に言えば教養課程を1年にして専門課程を3年と膨らまして、もっと極端には教養課程をほぼゼロにして専門ばかりを4年間教えても、大学教育として不適切ということはない。各大学の学部や学科の目標とするとともに合わせてどんなに自由に裁量してもらっても国家は関与せず。そのような自由な地平の中で大学教育の本分の達成のために改めて努めよ。

それが1991年の大学教育の方向の大転換ということだ。

とはいえ、`上、が転換すると`下、もすぐというわけには、教育の場合はなかなか行かない。入試もあれば必要な教員の問題もある。急に中身を変えられない。何年もかかる。それからもっと根本的な問題もある。「大綱化」と、4年制大学が専門教育の実を上げられなくなってきているとの特に1980年代以降の現実とを組み合せれば、そこから教養教育を減らして専門教育を増やすとの解が自然に導かれそうなものだが、事はそう単純ではない。現代文明があらゆる分野で複雑さを増しているということは、専門の分野に限らず教養の分野にも言えるだろう。大学が4年で足りなくなっているとすれば、小中高は12年で十分だという根拠も危ういものだ。一般教育が高校までで足りているから、大学でそこを積み増さずともよく、その分を専門教育に回して大丈夫と言えなくては、教養教育を削ってよい理屈は生まれまい。大学教育とは、あくまで総合人を育て、そこに各人なりの専門性を付与することによって成り立つのだろうから。総合人そっちのけで専門人作りに励みたいなら、専門学校の見直しと拡充こそが急務となるべきだろう。大学が大学を名乗るかぎりは教養を捨てられない。それが宿命なのだ。もちろんその宿命は悪い宿命ではない。教養のある専門人と、教養のある一般人と、教養のない専門人と、教養のない一般人。普通に考えて一番目と二番目の人の方が、三番目と四番目の人よりも、よりよいのではなからうか。そういう人を攻めて作るのが大学なのではないだろうか。

かくなる理由で「大綱化」の予想させた大学における教養教育の切り捨ては当初の世間の予想ほどには実現せずに経過したと言えるだろう。21世紀に求められる専門人は高度化する一方で、21世紀を生き抜くために求められる教養の質もややこしくなるばかりなのだから、大学の4年間のすべてを、一般的・総合的・教養的教育に充て、本格的専門教育は大学院以降に委ねるべきだという議論も、2010年代からは目立っているように思われる。要するに「大綱化」によって訪れるかに見えた教養教育の危機は、複雑繁多奇々怪々となる一方の世界の現実を前にして教養教育の重要性を再認識させる方向へと転換していったというのが21世紀に入る頃からの経過なのではあるまいか。`教養の逆襲、である。

慶應義塾大学に2002年になって教養研究センターが設置されたのもそうした時流の変化を確認させる出来事であった。「大綱化」以後の教養教育のもしかしての消滅への危機意識が教養の意義の旗を振らなければと教養研究センターを生み出して、そのセンターがその後の改めての教養教育の問い直し、重要性の確認を進めてゆく場として機能して今日に及んできているのではないかと。

けれどもここで反論もできる。教養教育が重要だと言っても、慶應の場合なら学部での教養教育の枠組みの敷衍で済む内容とすれば、わざわざ諸学部の外郭に教養研究センターを置く意味があるのかと。そこはやはりあるのだ。哲学や倫理学や経済学や政治学や文学や美術や音楽や物理学や生物学や歴史や近代思想史といった従来大学の「教養科目」では

覆いきれない領域が増殖しているのが複雑極まる現代社会というものなのだから。時流の変化によって需要が生ずるのだが、それを満たす新科目を容易には供給できない。学部ではどうしても機動的に振る舞えないということはある。そこで教養研究センターの出番なのだ。対話術やコミュニケーションの術について、物事の調べ方について、ゲームについて、アニメについて、金融について、文理の仕切りを超えて生命について、などなど。大学の教養教育の足らざるを補い、アクチュアルな授業やその他の催事をそれなりに展開できている自負はある。

詳しくは本報告書の諸項目に譲る。よろしくご高覧賜りたく。

(片山杜秀)

教養研究センターでは、様々な活動の広報に努め、センターの意義を常に発信している。講演会や公開講座などはポスター、チラシによって告知するとともに、ウェブサイトを活用して最新情報を随時発信し、研究・教育活動の周知を行っている。また、活動成果を公開する書籍などの出版にも力を入れている。

## 1. 基盤研究

■『基盤研究「教養研究」講演記録 2025 年度』PDF 版 ウェブサイト掲載

センターでは、基盤研究として 2017 年度より「教養研究」という研究講演会のシリーズを行っている。本記録では 2025 年度に行われた講演録 1 本を収める。

## 2. アカデミック・スキルズ

■『2025 年度「アカデミック・スキルズ」学生論文集』

2026 年 3 月 31 日刊行

センターの看板科目である少人数制授業「アカデミック・スキルズ」では、学期を通した指導によって学生が論文を完成させる。これを編集し、論文集として 2004 年度より毎年刊行している。

## 3. 「文理接続プロジェクト」論集

■文理接続研究会論考集『連接』第 3 号

2025 年 4 月 30 日刊行

センターの基盤研究「文理接続プロジェクト」の参加者による論集。6 本の論考を収める。

## 4. 「日吉学」論集

■『日吉学論集』第 2 号

2026 年 3 月 31 日刊行

センター設置の授業「日吉学」の参加者による論集。22 本の論考を収める。

## 5. 報告書

■『2025 年度第 14 回「庄内セミナー」報告書』

2025 年 11 月 30 日刊行

※ 2024 年度の第 13 回は実施直前に台風接近により中止となったため、報告書は刊行されず、

教養研究センター基盤研究講演会 no.11

オウム真理教事件を通じて現代社会を見る

—「御座されたもの」の回想のように—

日時：2025 年 6 月 4 日（水）18：10～19：40

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 1 階シンポジウムスペース

ちょうど 30 年前にオウム真理教団によって引き起こされた地下鉄サリン事件は、宗教的な集団が「先進国」の都市の真ん中で引き起こした無差別テロとしては、世界で初めての出来事であった。このとき、世界中の人は「こんなことが起きるのか」と驚いたのだが、その後の長い歴史を振り返ると、2001 年の 911 テロをはじめ、アメリカやヨーロッパの大都市では、いわゆる原理主義者たちが何回もテロを引き起こしてきた。オウム真理教によるテロは、21 世紀の政治・宗教的現象の予兆のようなものであった。有名大学の学生や出身者等の協力的エリートをおもなメンバーとしていた教団が、どうしてあのようなテロに走ったのか。オウムの終末論的な世界観、彼らが希求した（人間）関係のあり方などを検討すると、奇跡なことになづく。インターネットの大衆の普及の前後の日本の社会の、文化的な状況がわかるだけでなく、今まさに国際社会を舞台にして起きていること（たとえばトランプ現象）の本質が見えてくるのだ。現代社会で起きていることは、「オウムのなるもの」の、幻想の内容としては希釈された、しかし社会的な規模としては大幅に拡大された、（意図せざる）回想のようなものとして解釈できる。

講師：大澤 真幸  
社会学者

司会：片山 杜秀  
慶應義塾大学教養研究センター所長・法学部教授



講演要旨

大澤 真幸（社会学者）

1958 年長野県松本市生まれ。東京大学大学院社会学研究科卒。社会学博士。千葉大学文学部助教授、京都大学大学院人間・環境学研究科教授等を歴任。現在、個人思想『Thinking To』(左右社) 主宰。

著書  
『行きの代数学』（青土社）、『身体の比較社会学』（瑞草書房）、『増補 東洋の時代を経て』（ちくま学芸文庫）、『不可能性の時代』（筑波新書）、『オウム真理教の教義』（講談社、毎日出版文化賞）、『ふしぎなキリスト教』（橋本大三郎と共著、講談社）  
編訳書、中谷公治著『オウム』『オウムという宗教』（筑波新書、河合年鑑学芸賞）、『社会学』（講談社現代新書）、『東洋史の哲学』シリーズ（講談社）、『西洋近代の源』（朝日新書）等、著書多数。

1

回数の番号は飛び番となっている。

■『みなさん mirai プロジェクト 2025 年度活動記録』（慶應義塾大学未来先導基金・南三陸プロジェクト）

2025 年 12 月 10 日刊行

■『教養研究センター 2024 年度活動報告書』

2025 年 8 月 31 日刊行

## 6. 教養研究センターパンフレット

■ 2026 年 3 月 31 日刊行

センターを総合的に紹介するパンフレットのアップデート版。

## 7. Newsletter（ニューズレター）

■第 46 号 2025 年 5 月 15 日刊行

■第 47 号 2025 年 11 月 29 日刊行

教職員とセンター所員を対象とした広報の一環として、Newsletter を年 2 回刊行し、半年間の活動についてレポートを行い、今後の予定について告知する。巻頭言などのコラムもある。

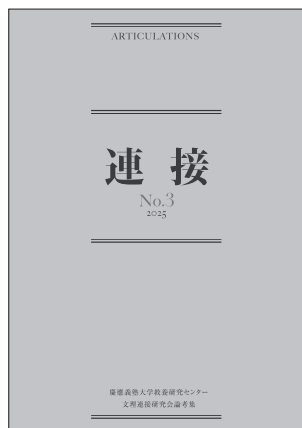
（高橋宣也）



## 2025 年度教養研究センター 刊行物一覧



アカデミック・スキルズ 2025  
学生論文集  
(2026.3.31 刊行)



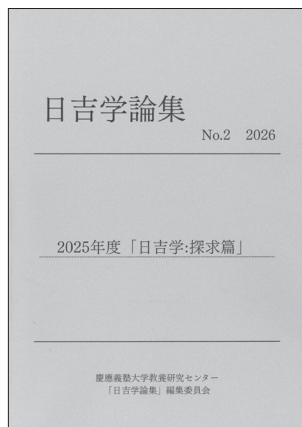
文理連接研究会論考集『連接』  
第3号  
(2025.4.30 刊行)



2025 年度第 14 回  
「庄内セミナー」報告書  
(2025.11.30 刊行)



みなさん mirai プロジェクト  
2025 年度活動記録  
(2025.12.10 刊行)



『日吉学論集』第2号  
(2026.3.31 刊行)



2024 年度活動報告書  
(2025.8.31 刊行)



慶應義塾大学教養研究センター  
パンフレット  
(2026.3.31 刊行)



Newsletter46 号  
(2025.5.15 刊行)



Newsletter47 号  
(2025.11.29 刊行)

## 基盤研究・一般研究・ 特定研究

教養研究センターの活動は多岐に及ぶが、大きくは3つに分類されている。その1が「研究関連プロジェクト」。以下の諸々が含まれる。

「基盤研究」の中の「教養研究」はその名の通りで、教養とは何か、その肝の部分を探掘しようとして研究し、ここ何年かは宗教をひとつのテーマにしている。

やはり「基盤研究」に属する「教養接続研究」は2本柱でやっている。1本目は日吉キャンパスの地の利を生かした大学と高校とを教養教育の場として接続させようとする試み。大学生と高校生と一緒に参加するということ。実験授業として行われている「庄内セミナー」にもこのやり方が敷衍されている。2本目は文理の接続。融合ではなく接続というのがミソで、教養研究センターの所員になっていただいている文系と理系の教員のみなさんが共同して研究会を重ねてゆき、ひとつのテーマに両面から切り込んで接続させる。教養研究センターの設置授業として長年展開してきている「生命の教養学」とも性質においては触れ合うところがあり、日吉における今日的教養教育を考えるうえでも重要な部位を成す。

学会等の開催支援は、教養研究センターの所員の先生方の携わる様々な企画をサポートしてゆく事

業だが、予算等の面でまだまだ及ばぬことも多からう。選書刊行やそれに関わる催事も所員の先生方の研究発表の媒体として機能していると心得ている。読書会は正規の授業の厳めしさを離れて教職員や学生が自由に意見を交わせる場として設けられており、たくさんの企画を並行して走らせられればそれに越したことはない。中心になって開いていただける先生を常に募集している。最終講義は日吉キャンパス所属の教員にはその習慣や制度が無かったと言ってよい状態が続いてきたのを教養研究センターとして変えたく制度化して定着をはかっているものである。

他にも触れるべきことはあろうが、最後に特記しておきたいのは、来往舎2階のプロジェクト研究室についてである。6室あって、教養研究センターの縄張りとなっている部屋もある。日吉の先生方が受け入れる外部の研究者の居場所として、あるいは会合の場として機能するものだが、日吉キャンパス全体の問題として、教室のみならず研究室も飽和してきている現状があり、諸研究所と歩調を合わせての様々な見直しがなされている。今後も時々での最適な利用のかたちを探って参りたい。

(片山杜秀)

### 2025年度・プロジェクト研究室(204室・205室)利用申請一覧

| 研究代表者            | 研究テーマ                                 |
|------------------|---------------------------------------|
| 津田 眞弓・経済学部教授     | デジタル化時代の古典文学・書誌学の研究と教育                |
| 小原 京子・理工学部教授     | 人間の言語理解と生成 AI：大学授業における生成 AI 利用の可能性を探る |
| 阿久澤武史・慶應義塾高等学校教諭 | 地域と連携した日吉地区の戦争遺跡の研究と教育的活用             |
| 劉 慶紅・経営管理研究科教授   | AI 倫理とマネジメント                          |



## 基盤研究 教養研究

「基盤研究」中の「教養研究」はこのところ「宗教」をテーマに継続してきているが、2025年度は、基盤研究講演会の通算で第11回目として、講師に社会学者の大澤真幸氏を迎え、「オウム真理教事件を通じて現代社会を見る ―「抑圧されたもの」の回帰のように」と題して、6月4日の夜、来往舎1階のシンポジウムスペースで行った。大澤氏がくださった講演趣旨の文章を以下に引かせていただく。

「ちょうど30年前にオウム真理教団によって引き起こされた地下鉄サリン事件は、宗教的な集団が「先進国」の都市の真ん中で引き起こした無差別テロとしては、世界で初めての出来事であった。このとき、世界中の人は「こんなことが起きるのか」と驚いたのだが、その後の短い歴史を振り返ると、2001年の911テロをはじめ、アメリカやヨーロッパの大都市では、いわゆる原理主義者たちが何度もテロを引き起こしてきた。オウム真理教によるテロは、21世紀の政治・宗教的現象の予兆のようなものであった。有名大学の学生や出身者等の知的エリートをおもなメンバーとしていた教団が、どうしてあのようなテロに走ったのか。オウムの終末論的な世界観、彼らが希求した（人間）関係のあり方などを検討すると、奇妙なことに気づく。インターネットの大衆的普及の前夜の日本の社会的・文化的な状況がわかるだけではなく、今まさに国際社会を舞台にして起きていること（たとえばトランプ現象）の本性が見えてくるのだ。現代社会で起きていることは、「オウムのなるもの」の、幻想の内容としては希釈された、しかし社会的な規模としては大幅に拡大された、（意図せざる）回帰のようなものとして解釈できる。」

つまり30年前に「カルト教団」の引き起こしたあまりに異常と思われた出来事が、今日の世界の予兆というか、その後あちこちで繰り返されてゆくパターンの原型をなし、それが変奏されながら反復し、ついには米国の大統領の振る舞い方にまで及んでいるという筋書きである。20世紀末のオウム真理教が21世紀の世界に先駆けるまさに「前衛」で



**6月4日(水)**  
18:10 ~ 19:40  
日吉キャンパス来往舎 1F  
シンポジウムスペース

無料・予約不要  
対象：研究者、教職員、関心のある学部生・大学院生

ちょうど30年前にオウム真理教団によって引き起こされた地下鉄サリン事件は、宗教的な集団が「先進国」の都市の真ん中で引き起こした無差別テロとしては、世界で初めての出来事であった。このとき、世界中の人は「こんなことが起きるのか」と驚いたのだが、その後の短い歴史を振り返ると、2001年の911テロをはじめ、アメリカやヨーロッパの大都市では、いわゆる原理主義者たちが何度もテロを引き起こしてきた。オウム真理教によるテロは、21世紀の政治・宗教的現象の予兆のようなものであった。

有名大学の学生や出身者等の知的エリートをおもなメンバーとしていた教団が、どうしてあのようなテロに走ったのか。オウムの終末論的な世界観、彼らが希求した（人間）関係のあり方などを検討すると、奇妙なことに気づく。インターネットの大衆的普及の前夜の日本の社会的・文化的な状況がわかるだけではなく、今まさに国際社会を舞台にして起きていること（たとえばトランプ現象）の本性が見えてくるのだ。現代社会で起きていることは、「オウムのなるもの」の、幻想の内容としては希釈された、しかし社会的な規模としては大幅に拡大された、（意図せざる）回帰のようなものとして解釈できる。

**大澤 真幸**  
Masachi Osawa

**プロフィール**  
1958年東京都松本市生まれ。東京大学大学院社会学研究科卒。社会学博士。千葉大学文学部助教授、京都大学大学院人間・環境学研究科教授等を歴任。現在、個人出版『Thinking 0』(文芸社) 主筆、『行為の代数学』(青土社)、『身体の比較社会学』(勁草書房)、『組織 虚構の時代の家』(ちくま学芸文庫)、『不安定な時代』(岩波新書)、『パンショナリズムの由来』(講談社、毎日出版文化賞)、『ふしぎなキリスト教』(朝川大三郎と共著、講談社現代新書、中央公論新書大賞)、『自由という牢獄』(岩波書店、河合早雄学芸賞)、『社会学史』(講談社現代新書)、『(世界史)の断片』シリーズ(講談社)、『西洋近代の罪』(朝日新聞)等、著書多数。

主催：東亜薬科大学教養研究センター お問い合わせ：toiowase-ib@edot.keio.ac.jp

教養研究センター主催 基盤研究 教養研究講演会  
no.11

オウム真理教事件を通じて現代社会を見る

―「抑圧されたもの」の回帰のように―

あったとも解される論旨で、実に刺激極まる鮮烈な内容で、会場に大きな反響を巻き起こした。あまりに異様と思われた事象があとから考えると未来を先取りしていた！ それに気づいていく人が現代史を尖端的に意味づけられる。大澤氏の眼力が冴えわたった一夜だった。

(片山杜秀)



が分断されがちである。しかし本企画では、同じ講演を共有し、その後の議論に参加することによって、異なる世代間に知的刺激の循環が生まれた。特に普通部生や塾高生にとって、大学レベルの議論に触れる経験は大きな刺激となり、大学生・大学院生にとっても、自らの学びをより広い社会的・歴史的文脈の中で捉え直す契機となった。

このように、HAPPによる活動は、単なるイベント運営ではなく、「教養」とは何かを身体的・空

間的・共同体的に問い直す実践でもある。芸術や文学を通じて、高校と大学、専門分野と日常、知識と感性を横断する場を形成することは、現代における教養教育の重要な役割の一つであるだろう。そして今回の企画は、慶應義塾における文学的伝統を再確認すると同時に、日吉という場から新たな文化的運動を生み出していく可能性を示す催しとなったのである。

(小菅隼人)



## 基盤研究

## 教養連接研究

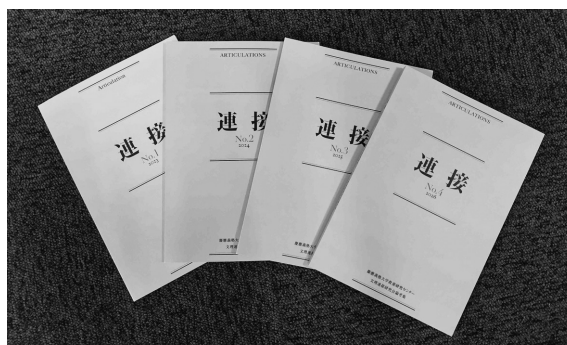
## 文理連接プロジェクト

「文理連接プロジェクト」は2019年度に開始し、2020年度から現在まで、1～2か月に1回程度の頻度で、「文理連接研究会」という名の小規模の研究会を継続的に開催してきた。2020年度と2021年度は「感染」、2022年度と2023年度は「エコロジー」、2024年度と2025年度は「人工」が研究会の共通テーマであり、これらのテーマの下で、様々な分野の研究者たちが、文理の「連接」を意識しながら、それぞれ独自の立場から独自の考察を展開し、共に議論を重ねてきた。

2022年度以降、この研究会は、年度末に論考集『連接』を作成することを前提に計画されている。論考の計画発表、中間発表、そして最終発表まで、複数回の発表と議論を通じて、相互に触発し合いながら、1年を掛けて各々が論考を完成させる形を採っている。

2025年度は、論考の計画発表に先立って2回のゲスト講演を企画した。以下が、各ゲスト講演の講演者ならびにテーマと、それに続く研究会の開催実績である。第1回研究会(2025年5月24日)富岡薫氏(東京大学特任研究員)による講演「日本における人工妊娠中絶の歴史と現状：過去、現在、そして未来へ」。第2回研究会(同6月28日)金子晋丈氏(慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター(DMC)所長、理工学部)による講演「ネットワーク：自然と人工のインタラクション」。第3回研究会(同7月19日)ワークショップ1「論考の計画発表」。第4回研究会(同10月4日)ワークショップ2「論考の中間発表1」。第5回研究会(同12月6日)ワークショップ3「論考の中間発表2」。第6回研究会(2026年2月28日)ワークショップ4「論考の最終発表」。

これらの研究会を経て、2025年度末に作成された『連接』第4号には、以下の8つの論考が収録された。①小川愛実「建築における「なじむ」という関係——人工を関係生成の条件として捉える」、②金景彩「人造人間のメロドラマ——植民地期朝鮮における『R.U.R.』受容の一考察」、③石田勝彦「人工物がつくったものは誰がつくったものか——「複製の法」と「生成の社会」の乖離」、④奥田知明



「ワクチンによる人工免疫化の効果と発生する有害事象のトレードオフ」、⑤荒金直人「ポスト真実とラトゥールの「批判」批判——人工物としての知識について」、⑥見上公一「「人工」という幻想：自然の「格納」をめぐる」、⑦原大地「ボードレールの「人工」と「楽園」」、⑧荒木文果「創造と規制——鏡像生命をめぐる一考察」。論考集『連接』は文理連接研究会の専用サイトで閲覧可能である(<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/bunri/>)。

文理連接研究会のこれまでの共通テーマである「感染」、「エコロジー」、「人工」は、いずれも単なる抽象的な概念ではない。これらのテーマによって私たちは、この世界の具体的な現実の前に引き戻されるのであり、このことが、異なる研究分野を繋ぐ土台になっている。分野に拘わらず、全ての研究者は、何らかの仕方で現実を見据えて研究をしているのであり、そもそも接続に意味があり、接続が可能であるのは、最初からこの共通の土台があるからだとも言える。現実を名指す言葉は多様であるが、「人工」という言葉もまた、現実的な諸問題を強く示唆するものであり、それが今回の8つの論考と2つのゲスト講演を結び付けている。

2026年度の文理連接研究会の新たな共通テーマは「接地 (grounding)」である。この言葉は多様な意味を持つが、基本的には「地に足を付けること」、「現実との接点を作ること」を意味する。これまでの共通テーマより、更に直接的に現実を名指す言葉だと言えるかもしれない。現実には絶えず目を向けつつ、より良い接続の可能性を模索したい。

(荒金直人)

# I 研究関連プロジェクト

## 研究成果公表 学会・ワークショップ等 開催支援

教養研究センターでは、所員が研究会・ワークショップ等を企画する場合、支援、奨励を行うことで所員の研究・教育の活性化を図っている。

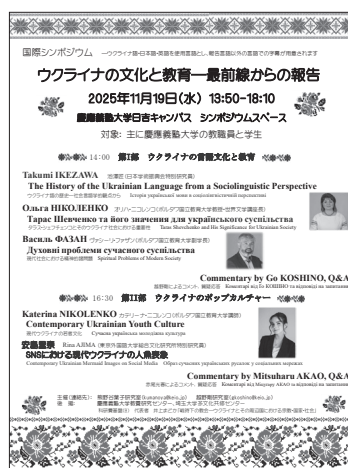
所員による創造的な企画や意欲的な挑戦を奨励し

促進することを趣旨としており、2025年度は春学期7件、秋学期6件の申請が採択された。

(片山杜秀)

### 2025年度 学会・ワークショップ等開催支援一覧

| 申請者                     | 会合名                                                                         | 開催日                            | 参加人数                               |
|-------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|--------------------------------|------------------------------------|
| 福田 桃子（経済学部）             | 「鳥の詩学」シンポジウム                                                                | 2025年4月26日                     | 塾内 40名<br>塾外 40名                   |
| 大鳥由香子（文学部）              | 『近代イギリスの動物史 歴史学のアニマル・ターン』ブックトーク                                             | 2025年5月11日                     | 塾内 4名<br>塾外 20名                    |
| 磯崎 敦仁（法学部）              | 公開シンポジウム「現代ベトナムを知る」                                                         | 2025年5月14日                     | 塾内 8名<br>塾外 66名                    |
| ソッティーレ・マルコ（経済学部）        | フランスにおけるマグレブ系「移民」映画『シャアバの子供』上映会、ならびに作家アズーズ・ベガークとの対談                         | 2025年5月18日                     | 塾内 4名<br>塾外 19名                    |
| 糟谷 大河（経済学部）             | 第9回総合危機管理学会学術大会                                                             | 2025年5月31日                     | 塾内 10名<br>塾外 35名                   |
| 井本 由紀（理工学部）             | 【観想研究ワークショップ・シリーズ】「なる」のオートエスノグラフィー                                          | 2025年6月15日                     | 塾内 10名<br>塾外 42名                   |
| 劉 慶紅（経営管理研究科）           | 日本経営倫理学会全国研究発表大会シンポジウム：「経営倫理基準としての『利他』の可能性－東洋の経営倫理思想の系譜と稲盛経営哲学」             | 2025年7月19日、20日                 | 塾内 20名<br>塾外 70名                   |
| 横山 千晶（法学部）              | チームMIMIZU 来日メンバーによる身体ワークショップ「私の身体と記憶をつなぐ」                                   | 2025年10月7日                     | 塾内 4名<br>塾外 23名                    |
| 熊野谷葉子（法学部）<br>越野 剛（文学部） | 国際シンポジウム：ウクライナの文化と教育－最前線からの報告                                               | 2025年11月19日                    | 塾内 70名<br>塾外 20名                   |
| 村山 光義（体育研究所）            | 慶應義塾大学体育研究所・公社）全国大学体育連合関東支部共催ワークショップ「ルーブリック作成と活用を考えるワークショップ＆ディスカッション」       | 2025年12月6日                     | 塾内 10名<br>塾外 12名                   |
| 桂田 昌紀（経済学部）             | Analytic Number Theory and Special Functions                                | 2025年12月8日～10日                 | 塾内 4名<br>塾外 56名                    |
| 荒木 文果（理工学部）             | 日吉キャンパスにえがく夢－第五校舎跡地から考える持続可能なキャンパスライフ<br>・展覧会『憩いの場・日吉展』<br>・シンポジウム『憩いの場・日吉』 | 2025年12月15日～19日<br>2025年12月17日 | 塾内 145名<br>塾外不明<br>塾内 41名<br>塾外 5名 |
| 越野 剛（文学部）               | 戦争記憶研究会第3回シンポジウム 戦争記憶のギャップを乗り越える                                            | 2026年3月25日                     | 塾内 3名<br>塾外 15名                    |



## I. 研究関連プロジェクト

### 研究交流

## 読書会推進企画「晴読雨読」

### 「アイデアの系譜学」読書会

日吉キャンパスに創造的混沌を！

○気づくと傍らにある「お喋りの場」を目指して

毎回ちょっと謎めいたお題を掲げ、各自が気になる書籍や日々の経験を持ち寄る「ブックトーク企画」（アイデアの系譜学読書会）も三年目を迎えた。本年度の初回は「思考のリズム感覚、論理のスタートダッシュ」と銘打ち、新生活が始まった日吉の春の空気を大きく吸い込んで、キックオフを行った。本読書会が日吉キャンパスで「おなじみの会」になりつつあることを受け、今年度はブックトーク企画を日吉のさまざまな場、その時々々のシーズン感と連動させることを意識している。ちょうど4月の終わりに「鳥の詩学」なる文芸イベントが来往舎で開かれていたのを発見し、これに触発されて5月の読書会テーマは「鳥たちの来襲？ 歌声・かたち・移動」と設定した。暑さと湿気が無視できないレベルになってくる7月には「熱帯的感受性：ムシムシの彼岸にある言葉たち」と題して、和辻哲郎の風土論などについて紹介を行った。1月に年度最終回となる「動く・浮かぶ・静止する：体育からデザインにいたる身体感覚」を実施するまで、計八回のトーク機会を持つことができた。

毎回、さまざまな人たちがトークの場にやって来る。25年度の初回では慶應義塾高校の学生達が、先生に引率されて参加してくれた。ポスターの説明文にあった「現象学」というワードに興味を持ち、高校で開講されているゼミのメンバーで、未知の世界に飛び込んできてくれた。夏以降、慶應義塾高校の英語科の先生も、時々参加してくれるようになった。11月の「お悩み相談の機微：マジメとユカイの間で泳ぐ」では慶大出版会の編集者の方も、ブックトークの輪に加わってくれた。12月の『「間合い」の研究：感じる近さと思考の遠さ』では、三田キャンパスからドイツ語の先生がフラッとやってきて、家族生活における間合いについて語ってくれた。このくらいの時期から、協生環境推進室スタッフの方も定期的に参加をしてくれるようになり、「教員と学生」という授業の定型を越え、日吉に関わる人たちがフラットに話をする場が形成されつつ



2025年度教養研究センター主催読書会 晴読雨読  
アイデアの系譜学②

若澤佑典文学部准教授  
(日吉・英語)

＜読書科目が違いになっても、言葉は違いにならないでね＞  
ここ日吉キャンパスには、いろんな分野の学生さんが授業に通っています。それぞれの学びは多岐多岐である一方、文理問わず、あるいは学部に関わらず、みなさん何かしらの読書科目を履修していることは、共通しているでしょう。キャンパス内にある慶應義塾高校でも、英語はもちろんのこと、それ以外の外国語を学ぶ機会もあるようです。文学部のように外国語の芸術的な側面にフォーカスする学部もあれば、医学部のようにメディカル・イングリッシュが焦点となる学部もあります。読書が楽しい人もいれば、細早く読書授業に行くのが苦痛な人もいます。読書をめぐる気持ちや学びの内容も、人によって、所属先によって、選択した外国語によってさまざまです。今回はお隣の「外国語をまなぶ風景」について、知られざるその姿を共有してみたいと思います。黒田龍之助『物語を語った外国語』や白水社編集『「その他の外国文学」の翻訳者』を併せて紹介します。

「アイデアの系譜学」読書会とは…  
「アイデアの系譜学」(History of Ideas)という学際分野を参照しつつ知の生成・伝播・変容をテーマに「あれこれ語る」書庫を持ち寄り開く会になります。前回の継続参加、今回の早稲田参加の方を歓迎します。日吉の1～2年生だけでなく、三田の上級生、湘南藤沢や信濃町からの参加、時には高校生や教員たちの「往来がある」ことが本会の特徴です。当日、どんな流れになるかは、集まってみるまで主催者も分かりません。「創造的混沌」を目指します！

語学愛!!  
あるいは学びへの憎しみ?

12月23日(火)  
17:00～  
18:00 (予定)  
※途中入退室可

場所：日吉キャンパス  
来往舎1階103/104  
対象：塾生・教職員  
(卒業生、高校生も  
来場を歓迎します！)  
★事前登録不要★

問い合わせ：  
follow@kaiyodan.kyodai.ac.jp

ある。

年末の「語学愛!!あるいは学びへの憎しみ？」では、教養研究センターの事務スタッフの方々や留学から帰国した卒業生も参加してくれた。夏休み期間に実施した「弱音の効用：フラジャイルなものの愛で方・接し方」の回では、やはり卒業生で他大学の大学院に進んだ学生さんが、日吉に里帰りをする感じで様子を見に来てくれた。日吉にはいろんな人たちが行き交っており、ブックトークの機会によって、普段にはない「動線の交わり」が生まれている様子である。引き続き、103・104号教室をハブとして、ふと気がつく「何か楽しそうなことを、みんなで行っているなあ」と思ってもらえる場作りを進めていく。日吉キャンパスは言葉の森であり、みんなにとっての（ときどき帰省できる）ふるさとである。

(若澤佑典)



## 研究交流

横山千晶教授 最終講義に寄せて  
知性と共感の軌跡

横山千晶先生は、英文学に広く精通し、ウィリアム・モリスとジョン・ラスキンの研究において日本の第一人者である。先生の業績の特筆すべき点は、単なる学術的な研究にとどまらず、それを教育的な実践や具体的な社会的活動へと結びつけてきた革新的な仕事のあり方にある。

教養研究センター所長としての功績も極めて大きい。大学における初年次教育の理想的なモデルとして非常に高い評価を受けてきた「アカデミック・スキルズ」や、従来の座学中心の授業運営のあり方を根本から再考させる画期的な双方向的授業「身体知」を設計した。これらの科目を十数年にわたって自ら教え、学生たちに主体的な学びの基盤を提供し続けた功績は計り知れない。

2026年2月2日に日吉キャンパスで開催された最終講義「存在の耐えられない軽さの跡を残す」は、研究と教育、そして社会活動を三位一体として実践してきた横山先生の生の軌跡を、シンポジウムスペースを埋め尽くした聴衆が文字通り体感する絶好の機会となった。講義は、私たちが現在置かれている複雑な政治状況の考察から始まり、英国でのリサーチの真の目的を解き明かしつつ、ラスキンと労働者大学（ワーキングメンズ・カレッジ）の関係性を紹介していく、極めてスリリングな展開であった。

その緻密な議論のなかでも、特に多くの聴衆の心に深く触れることになったのは、横山先生の「存在の耐えられない軽さ」を担うことを余儀なくされて

**法学部**  
**横山千晶先生**  
**最終講義**  
「存在の耐えられない軽さの跡を残す」

横山千晶教授のご専門は、ウィリアム・モリスやジョン・ラスキンを中心とする19世紀のイギリス文化です。研究と教育では、モリスやラスキンの思想を現代にどのように応用していくことができるのか、というアクチュアルな問いを、学生や同僚たちに問い続けてきました。教養研究センターでは、所長としての様々なご尽力に加えて、「身体知」の授業を立ち上げ、同授業を20年に及び担当されてきました。横山教授のご尽力に対して心より感謝申し上げますとともに、その感謝の気持ちの一つとして最終講義をオーガナイズさせていただきます。

発起人一同

**プロフィール**  
1960年北九州市生まれ。1989年より慶應義塾大学法学部で働き始める。専門は19世紀のイギリス文化。ここ数年間、ウィリアム・モリスやジョン・ラスキンの活動を支え続けた名もなき後継者たち、職人や実業家の足跡をリサーチしている。また2000年6月より横浜市中区の寿地区の近くで、居場所「カドベヤで讀む火曜日」を運営。モリスやラスキンが目指した「人の暮らしの喜び」を可視化する小さな営みを続けて今年で15年目に入りました。

**日時** 2026年2月2日(月) 14:00~15:45  
**場所** 日吉キャンパス来客室1Fシンポジウムスペース  
**対象** 学生、教職員、一般 **定員** 無し **申込み** 不要  
 横山先生のご意向により、花束の贈呈は固くお断り致します

発起人：佐藤元状 近藤康裕 永徳友 星野真志（法学部）  
 慶應義塾大学教養研究センター主催 お問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

いる人々への深いコミットメント（関わり）の姿勢である。先生は、ヴィクトリア朝の文学や思想を緻密に研究しながら、そこで培われた共感的な想像力を、決して机上の空論にはしなかった。その知性は、横浜の寿地区における社会的活動の場「カドベヤ」での実践へと地続きでつながっていたのである。

文字の奥にある他者の痛みを想像し、社会の周縁に置かれた人々の声に耳を傾けること。そして、その関わりの中から新たな問いを見出していくこと。「倫理」という言葉ほど、横山先生の世界への関わりを形容する言葉としてふさわしいものはないだろう。横山先生が体現してきた誠実な知性のあり方と、境界線を越えて連帯していく行動力から、私たちは極めて多くの大切な教訓を学ばせていただいた。学問が社会において果たすべき真の役割を示し続けた先生の歩みは、これからも多くの人々の行く手を照らす道標であり続けるに違いない。

（佐藤元状）

## Ⅱ 教育開発関連プロジェクト

### 1 設置科目

#### 1-1 アカデミック・スキルズ

[小佐野弾寄附講座]



例年通り3クラスを春学期と秋学期、通年で履修できるかたちで開講した。この授業は教養研究センターの設置講座の中でも「生命の教養学」と並んで老舗中の老舗である。センターの設置が2002年7月で、2004年に「スタディ・スキルズ」という授業を始め、翌2005年に「アカデミック・スキルズ」と改称して現在に及んでいる。授業の趣旨はその名の通り、学問をするためのスキルを身につけてもらうということ。春学期も秋学期も原則として履修者に論文を書いてもらう。春学期の目安は4000字。秋学期の目安は8000字。字数が増えるのは通年履修を前提に考えているからだ。もちろん半期ずつが学生の履修法の原則だから、春だけ、秋だけということにもなる。そこを裁量するのは担当教員の腕前だ。この授業は複数の教員による少人数制を原則としている。そうでないと論文執筆の指導は難しい。とにかく論文を執筆するには、アカデミックな形式を踏まえねばならぬし、適切な文体を会得せねばならぬし、学問的な資料調査法を实践せねばならぬし、さらに論文の規模に相応しいテーマの選択・絞り込みを行なえねばならない。論文が出来れば口頭発表も。それに対する質問の仕方も。グループ・

2025 年度教養研究センター設置科目

# Academic skills

アカデミック・スキルズ

## Presentation

プレゼンテーション

## Competition

コンペティション

2月6日(金) 13:00~16:00 (予定)

<発表者: 2025 年度「アカデミック・スキルズ」クラスⅠ・Ⅱ代表者>

毎週、日吉の学生たちが来往舎の一室に集まり、論文執筆に励んでいたのをご存知でしょうか? 慶應義塾大学教養研究センターでは、学部横断的な科目として「アカデミック・スキルズ」を設置し、共に考え、調査を行い、問いを論ずるレッスンをしています。今回のコンペティション企画では、授業参加者の代表たちが、自らのリサーチ結果を紹介し、オーディエンスの前で大いに論じます。ぜひその成果の目撃者となり、質疑応答や賞の審査に加わってください。

場所: 日吉キャンパス来往舎1F シンポジウムスペース  
対象: 塾生・塾員・教職員 ★事前予約不要★

「アカデミック・スキルズ」履修者・関係者でなくとも、研究発表や論文執筆に興味がある方は、誰でも来場できます。2026年度の履修を考えている方には、授業の雰囲気を知るきっかけになるでしょう。ぜひ見学にいらしてください。

主催: 慶應義塾大学教養研究センター お問い合わせ: toiwasse-ib@adsk.ken.ac.jp

ワークで共同論文を書くことも可能だ。そのほか、いろいろな作法が論文をしたために絡んでくるだろう。通年とは言わず、半期だけでも履修して作法に開眼してくれば、その後が違う。3、4年生の履修も可だが、主には1、2年生だから、日吉の授業としてよいものである。しかもこの授業が始まった頃は、論文やレポートの書き方、リサーチの仕方、発表のやり方といったスキルに目を向けた講座は、慶應のみならず、日本の大学に珍しかった。本授業は他大学から先駆的と評価されることもあった。しかし幾星霜を経た。今日では慶應内でも他大学でも珍しいとは言えないだろう。ひとつのオーソドックスである。だったらそろそろ違ったやり方を探ってもよい。学問的対話のスキルを身につけるとか。論文に限らぬ幅広い「学問的創作」を試してみようとか。2025年度は3つの授業のうちの1つを「違ったやり方」に、2つを「オーソドックスなやり方」に当てた。老舗を続けていくための試行錯誤の時期と言える。

(片山杜秀)



## 1 設置科目

### 1-2 身体知

#### —創造的コミュニケーションと言語力

教養研究センター設置科目の「身体知—創造的コミュニケーションと言語力」は、夏の6日間を使つての集中講座である。本講座は文学作品を書かれた言語のみならず、身体表現や視覚芸術を使って読み解き、その体験をまた言語表現へと還元していくという新しい教育モデルとして、2010年に開講された。また、通学生が通信教育課程の学生と共に学ぶというユニークな履修者構成も、世代を超えた文学解釈と表現体験を可能としている。2025年度の授業は、この「身体知—創造的コミュニケーションと言語力」の最終年となった。本年度は身体知の歴史にふさわしく「はじまりと終わり」をテーマとする三つの短編小説をテキストに据え、8月11日から16日までの6日間を使つての講義となった。講師には、この3年間身体知の授業を共に培ってくださったダンサー兼振付家のアオキ裕キ氏のほか、作詞家として活躍するアーティストのエンドケイプ氏、コミュニティダンスのファシリテーターを務める寒川明香氏を迎え、身体・言葉・コミュニティの3つの柱のもとで安心できる環境を構築し、体と言語の可能性を追求する授業を展開した。

今年のテーマ、「はじまりと終わり」はまさにこの授業の始まりを見直し、終わりを作り上げるという意図を含むと同時に、現在私たちが置かれている混沌とした世界を表すテーマでもある。教材として取り上げたのは、核実験を題材としたレイ・ブラッドベリの「刺繍」、生き物の心臓を題材に使ったブライアン・ドイルの「ジョヤス・ヴァラドラス」、そして夫婦の一生を、宇宙の誕生の中に埋め込んだジェニー・ホロウェルの「あなたを含めて何かもの歴史」の3つの短編である。講師には作品の読解段階から授業に参加してもらい、そこから身体表現の可能性を受講者とともに探る作業を展開した。本年度はアオキ氏以外に作詞家のエンドケイプ氏をお招きし、物語の真髄を各自が「歌詞」として作り直す作業を行った。またインプロビゼーション演劇の

監督も手掛けるエンドケイプ氏には、相手の動きを否定するのではなく受けとめる形で物語を足していくインプロの技法を使うワークショップも行ってもらい、演劇を通しての物語の紡ぎ方も伝授していただいた。最終発表会には、アオキ氏の率いるダンスカンパニー「新人Hソケリッサ!」のメンバーも加わり、力強いパフォーマンスを展開することができたのみならず、エンドケイプ氏の指導をもとに作った「刺繍」をテーマとした歌詞に、音楽家がメロディをつけ皆で歌うことができた。

同時に、2026年1月21日には、作家の町田康氏、音楽家のあだち麗三郎氏を迎えてのソケリッサ!の公演に身体知の履修者が参加することで、身体知クラスのもう一つの最終成果の場を持った。

本年度も授業の初日から講師陣に密に関わってもらうことで、学生たちの身体や精神的な変化にも気を配っていただいたことで、学生たちも安心して授業に入り込むことができた。また、本年度は「言語」の部分にも力を入れるために、エンドケイプ氏をお招きできたことは大きい。散文を詩に書き換える作業は、自ら物語の真髄を抽出する高度な解釈力を必要とする。その成果として、今年の発表会では身体と言語の2点から、創作発表会を行うことができた。

この2025年度の夏をもって、教養研究センター設置科目「身体知—創造的コミュニケーションと言語力」は15年（実験授業の期間を入れると20年）の幕を下ろした。最終日の8月16日には成果発表会を開催し、実験授業のころを含む過去の「身体知」履修者も大勢参加。これまでの授業を振り返るひと時となった。履修者を通して授業成果がいろいろな場面で花開いていく確信を残して授業は終わった。

そしてその余韻を味わうかのように1月21日のイベントテラスにおいて、作家、町田康の朗読で身体知の履修者が躍る姿は、からだと心と言語が一体

となる真髄を見る一瞬を提供した。今後、このクラスが伝えてきたDNAが履修者を通して様々なコミュニティに広がっていくことを確信している。

(横山千晶)



## II 教育開発関連プロジェクト

### 1 設置科目

#### 1-3 身体知・音楽

教養研究センター設置科目である「身体知・音楽」は、2022、2023、2024年度に引き続き、サポートをお願いできる企業を見つけることができないまま、寄附講座ではない形で2つの授業が開講された。内訳は、器楽クラスである、「古楽器を通じた歴史的音楽実践」と、声楽クラスである「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」であった。どちらの授業においても、履修者数に大きな変化は見られず、結果、例年通りの規模での開講となった。

2025年度の器楽クラスは、前年度同様、25人規模のバロック・オーケストラが編成された。古楽器のみを使ったこの規模のオーケストラは非常に珍しく、一般大学だけでなく音楽大学でこのようなことが授業として行われている事例は日本では皆無である。ちなみに、常設のプロの演奏団体すらこのような大きなアンサンブルは、国内では稀である。

器楽クラスの成果発表演奏会は、例年通り2回行われた。第1回となる、室内アンサンブルの演奏会は2年目以降の履修者が中心となって、7月13日に行われた。《バロック後期器楽作品の混合趣味》と題されたこの演奏会のプログラムは、主にドイツの18世紀前期の音楽家たちが、いかにイタリアおよびフランスから影響を受け、自分たちの音楽文化を形成していったかを伺う内容であった。器楽クラスの参加者全員による古楽オーケストラの演奏会は、フランスバロック後期のオーケストラ作品を中心とした内容で、2026年1月10日に開催された。

声楽クラスにおいては、昨年度同様、少人数のメリットを生かして、きめ細かな指導が行われた。18世紀後期のロンドンで活躍した、ヘンデルによるオーケストラの伴奏が伴う合唱曲を扱った。成果発表は、上記古楽オーケストラと共演する形で行われた。

また10月には、2023年以来2度目の共演となる、ドイツのヴェルニゲローデ放送合唱団青年部との合同演奏会を行った。今回は、ヘンデルのオラトリオ《メサイア》の合唱曲を抜粋の形で共演した。そこには器楽クラスの古楽オーケストラだけでなく、声楽クラスのメンバーも合唱に参加した。

上記3つの演奏会においては、YouTubeを介したライブ配信を、2020年度以降の継続事業として2025年度も引き続き行った。

(石井 明)

慶應義塾大学教養研究センター・日古行事委員会 (HAPP) 日古音楽祭2025 第2回

慶應義塾大学古楽アカデミー・  
室内アンサンブル演奏会  
《バロック後期器楽作品の混合趣味》

Program

ヨハン・アドルフ・ハッセ (1699-1763)  
2つのフルートと通奏低音のためのソナタ長調 作品504 (London, c.1739)

ルイ・アントワーン・ド・ボルネ (1686-1757)  
3つのヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ 短調 (Paris, 1709)

ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル (1685-1759)  
2つのヴァイオリン、ヴィオラ、通奏低音のためのソナタ長調 作品504 HWV 399 (London, 1739)

ゲオルク・フィリップ・テレマン (1681-1727)  
オーボエ、オーボエ・ダ・カモ、通奏低音のためのソナタ 長調 TWV 2:19

アントニオ・ヴィヴァルディ (1678-1741)  
2つのヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ 変奏曲 作品107 (Venice, 1706)

ジャン・ロベール・カステル・ド・モンペリエ (1708-1772)  
2つのヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ 短調 作品306 (Paris, 1734)

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ (1685-1750)  
フルートと通奏低音のためのソナタ長調 BWV1034

テレマン  
フルート、ヴァイオリン、ヴィオラ・ダ・カモ、通奏低音のための  
《新曲集(第2巻)》より  
第1番 二長調 TWV 4:11 (Hamburg, 1706)

2025年7月13日(日)  
14時開演(13時半開場) 入場無料・事前申込不要

出 演：慶應義塾大学・古楽アカデミー・室内アンサンブル(ピリオド楽器使用)  
石井 明(全席指導/オケストラ・ドラヴェルツ)  
場 所：藤沢記念ホール(慶應義塾大学日吉キャンパス地下鉄グリーンプリン) 後9分  
日 吉 駅(東急東横線・目黒線・新横浜線/横浜駅地下鉄ブルーライン)徒歩1分  
主 催：慶應義塾大学教養研究センター・日古行事委員会(HAPP)/慶應義塾大学日古音楽祭研究室  
問合せ：慶應義塾大学日古音楽研究室 045-566-1339 <http://www.musicology.kyushu.ac.jp/>

Designed by Xaari Hirayama (Musicology Office, Kyushu University)

慶應義塾大学コロシアム・ムジウム文化交流プロジェクト2025

慶應義塾大学古楽アカデミー  
オーケストラ・小合唱  
ヴェルニゲローデ放送合唱団青年部  
再来日記念合同演奏会

＜ヴェルニゲローデ放送合唱団青年部との再共演＞  
慶應義塾大学古楽アカデミー・オーケストラは、2023年頃に、ヴェルニゲローデ放送合唱団青年部とが共同で制作した録音を行い、その録音実況を聴いた日古音楽祭2025において、バックの《マフィア》作曲200周年を記念する演奏会を行いました。  
2025年10月に、ヴェルニゲローデ放送合唱団青年部が再び来日することになり、両大学が共同で古楽アカデミー・オーケストラは、ヴェルニゲローデ放送合唱団青年部とが共演することになりました。

出 演：慶應義塾大学・古楽アカデミー・オーケストラ(ピリオド楽器使用)・小合唱  
ヴェルニゲローデ放送合唱団青年部  
ロベルト・ゲストル/石井 明(指揮)  
神戸実子(ソプラノ)

Program

ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル (1685-1759)  
《メサイア》 第1部より合唱曲 ほか

2025年10月12日(日)  
18時開演(17時半開場) 入場無料・事前申込不要

場 所：藤沢記念ホール(慶應義塾大学日吉キャンパス地下鉄グリーンプリン) 後9分  
日 吉 駅(東急東横線・目黒線・新横浜線/横浜駅地下鉄ブルーライン)徒歩1分  
主 催：慶應義塾大学教養研究センター/慶應義塾大学日古音楽研究室  
問合せ：慶應義塾大学日古音楽研究室 045-566-1339 <http://www.musicology.kyushu.ac.jp/>

Designed by Xaari Hirayama (Musicology Office, Kyushu University)



## Ⅱ 教育開発関連プロジェクト

### 1 設置科目

#### 1-4 日吉学

～探求編 探ってみようその先を～

【株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座】

「日吉学」は、キャンパスを中心とした「日吉」を多様な角度から観察して、学生一人一人が何か独自の疑問を発見し、最終的に4000字の註付論文にまとめることを目指すアクティブラーニングの授業である。2013年に教養研究センターの実験授業として開始され、2019年に寄附講座として正式な授業科目となった。今では多くの学生に知られた、日吉における特徴ある名物授業の一つと言っても過言ではない。また、慶應高校生も参加可能なプログラムと位置づけられているほか、様々な教員や日吉学の修了生が気軽に顔を出し、フィールドワークや議論に加わるのもこの授業の特徴である。

2025年度も一貫教育校と大学の枠を越え、地学、生物学、考古学、中世史、近現代史、学校史、哲学、文学など多様な専門を持つ9名の教員が共同で担当し、25名の意欲的な学生と慶應高校生3名が論文執筆に取り組んだ。

過去には、「縄文編」「戦争編」「景観編」など、論文で扱うテーマをある程度絞り込んでフィールドワークや講義を行った年もあったが、最近では広く多様な分野のフィールドワークをまず行って受講生の関心の掘り起こしをはかり、その上で、自らの論文テーマを見つけ出してもらうことを目指している。そのため、日吉の地学的、地理学的な視点から、古代から近現代までの歴史学的な視点から（特に日吉キャンパスの建設と戦争の時代を中心に）、また多様な生物とその保全の観点からなど、異なるテーマで何度も歩き回るフィールドワークの時間を設けている。今回の訪問先では、生物学的な視点でのフィールドワークで大きくコースが変わり、日吉記念館裏側や普通部生、塾高生が関わりながら雑木林の再生に取り組んでいるマムシ谷の森の植生の観察が行われたほか、歴史地理学的な視点では、日吉の丘公園周辺を訪問したことが、筆者にとっては新鮮であった。また、コロナ後は授業時間外で希望者のみを対象としていた日吉台地下壕（旧海軍連合艦隊司令部地下壕）見学も、久しぶりに授業時間内で、日吉台地下壕保存の会の協力を得て実施した。あまり受講者に「教えすぎない」ことを教員で申し合わせ、受講者自身が自由な発想で問題を発見し、



キャンパス内の歴史フィールドワーク（藤山記念館前）



マムシ谷の自然フィールドワーク（日吉記念館下付近）

探求してもらうことを目指し、実際に教員が想像もしないことに着目して「探求」する姿は、教員にも大いに刺激となった。

従来は履修者が20名に満たない規模であったが、本年は初めて当初の履修登録者で登録を打ち切りとし、さらに初回授業参加者で人数の絞り込みを行った。最終提出された論文は、昨年から学生数名の編集委員の手で論文集として形に残すこととし、今年度も『日吉学論集』第2巻（探求篇）全126ページとしてまとめられ、22本の論文が収録された。今後もこの授業が、単に毎年開講される授業科目としてのみならず、学生たちの知的好奇心と学術的視座のゆりかごとして、またこのキャンパスを対象とした学術研究の源泉地として、発展し続けてくれることを期待したい。

（都倉武之）

## Ⅱ 教育開発関連プロジェクト

### 1 設置科目

#### 1-5 ゲーム学

【株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座】

「ゲーム学」はデジタルゲームをアカデミックに考察することを目的とした講座である。2025年度は株式会社コーエーテクモホールディングスの襟川陽一氏、ならびに同社、早矢仕洋介氏、三嶋寛了氏による特別講義を皮切りに、以下のプログラムがつつがなく実施された。履修者はやや減少し、70名ほどだったが、出席率やリアクションペーパーの

充実度は高く、質疑応答も活発におこなわれた。本年度の講義ではとりわけ、デジタルゲームの他分野での応用の広がり、AIとの関係といった主題が印象に残った。来期もまた新たな講師陣をお迎えし、デジタルゲームについて考察をさらに深めていきたい。

（新島 進）



堺 文男氏



大里雄二氏

#### 2025年度 秋学期「ゲーム学」

##### ■シブサワ・コウのゲーム開発、新しさを創造するゲーム開発プロセス、新しい発想をプロダクト化しやすくするためのゲームエンジンのデザイン

襟川陽一

（株式会社コーエーテクモホールディングス 代表取締役会長兼 取締役会議長）、早矢仕洋介（株式会社コーエーテクモゲームス 取締役副社長）、三嶋寛了（株式会社コーエーテクモゲームス 執行役員フューチャーテックベース部長）

##### ■イントロダクション

新島 進（慶應義塾大学 経済学部 教授）

##### ■デジタルゲームに見る着せ替え人形的表現

堺 文男（尚美学園大学 総合政策学部 講師）

##### ■ゲーム産業の基本構造

小山友介

（芝浦工業大学 システム理工学部 教授）

##### ■（実践）中国巨大市場への挑戦

大里雄二（ZENY 株式会社 代表取締役 COO）

##### ■デジタルゲームの感性学

吉田 寛（東京大学 教授）

##### ■ゲーム依存について——精神分析／精神医学の観点から

藤田博史

（医療法人ユーロクリニック理事長・狭山メンタルクリニック院長）

##### ■フランスにおけるビデオ・ゲーム

ローベル・ロラン

（慶應義塾大学 商学部 非常勤講師）

##### ■CG制作の御紹介

野末武志

（株式会社スクウェア・エニックス 執行役員）

##### ■社会課題解決・コミュニケーション技法としてのシリアスゲーム活用

標葉靖子（実践女子大学 人間社会学部 教授）

##### ■ゲームと文学——テキスト、仮想現実、身体性

新島 進（慶應義塾大学 経済学部 教授）

##### ■ゲームとヒューマンエージェントインタラクション

大澤博隆（慶應義塾大学 理工学部 准教授）

##### ■ゲームをフェミニズムする、クィアする（オンデマンド）

近藤銀河

（東京芸術大学大学院 美術研究科先端芸術表現専攻博士課程）

##### ■コミュニケーションを拡張するインターバース技術とバーチャルエコノミーの拡大

大隈隆史

（産業技術総合研究所人間拡張研究センター総括研究主幹）

## 1 設置科目

### 1-6 エンターテインメントビジネス論

[株式会社アカツキ寄附講座]

2025 年度春学期に「エンターテインメントビジネス論」を実施した。本講義は、アニメやゲームをはじめとしたエンターテインメントビジネスについて、理論と実務の双方から学際的・分野横断的なアプローチを行うものである。2022 年度の実験授業を経て、2023 年度から株式会社アカツキ寄附講座として正式に開始された。今年度も前年度に引き続き、三原龍太郎（経済学部准教授）がコーディネーターを務め、授業運営は主に非常勤講師の中山淳雄が担当した。

中山や慶應義塾大学教員によるエンターテインメントビジネスに関する講義に加え、アニメ、テーマパーク、映画、芸能、ゲーム、ショートドラマといったエンターテインメントビジネスの各分野で活躍されているゲストスピーカーと中山が対談を行う



という形式で進められた。ゲストスピーカーは毎回非常に豪華なメンバーで、出席者と登壇者との間で活発な議論が交わされ、非常に充実した内容となった。

（三原龍太郎）

#### ■エンタメビジネス全体像

中山淳雄

（（株）Re entertainment 代表取締役社長、慶應義塾大学非常勤講師）

#### ■アニメー業界ゲストとの対談

和田丈嗣

（株式会社プロダクション・アイジー代表取締役社長）

#### ■芸能ー業界ゲスト講師との対談

山崎怜奈（株式会社マウントケープ）

#### ■映画ー業界ゲスト講師との対談

藤村哲哉

（株式会社フィロソフィア代表取締役社長、元ギャガ創業者）

#### ■パークー業界ゲスト講師との対談

藤田和巳

（株式会社サンリオエンターテイメント執行役員）

#### ■「中国アニメの現状と展望」

山下一夫（慶應義塾大学理工学部教授）

#### ■アニメー業界ゲスト講師との対談

西村浩哉

（元ディーライツ、ローソンエンタテインメント事業本部長）

#### ■「近年の中国語圏映画製作と興行」

吉川龍生（慶應義塾大学経済学部教授）

#### ■ドラマー業界ゲスト講師との対談

仲子拓也（株式会社 GOKKO）

#### ■芸能ー業界ゲスト講師との対談

山田邦子（日本喜劇人協会 11 代会長）

#### ■ゲームー業界ゲスト講師との対談

鈴木 尚

（元株式会社スクウェア代表取締役社長、LDH 会長、楽天常務）

#### ■AIー業界ゲスト講師との対談

くりえみ（AiHUB 株式会社執行役員 CMO）

#### ■「日本アニメのアジア展開」

三原龍太郎（慶應義塾大学経済学部准教授）

※掲載の情報は、教養研究センター Web サイト公開当時の情報に基づいています。



## 1 設置科目

## 1-7 金融リテラシー入門

[SMBC グループ寄附講座]

SMBC グループ寄附講座「金融リテラシー入門」は、教養研究センター設置科目として、2024 年度の実験授業を経て、2025 年秋学期に開講となり 120 名の定員を大きく上回る履修登録希望を得た。本寄附講座は十数大学で展開されているが、大学としてオリジナルのカリキュラムを組んでの開講は初で、半期の全 14 回のうち 10 回については、塾内の教員、或いは塾員で士業に付く講師を招聘し、残り 4 回を、SMBC グループの各企業から講師を派遣いただき授業を編成した。

いずれの回も、実施前に内容の入念な打ち合わせを行い、更に、各回の学生からのリアクションペーパーの内容や、全ての授業後に、学生希望者数名と 2 時間ほど授業の振り返りや議論の場を設け、可能な限り授業と並行して内容のアップデートを行っていくような仕組みを構築し、更に、正規の回に加えて補講も実質 2 回実施した。また AI 時代に伴い、学生全員が同じ答えとなるような課題は控え、個々人のオリジナリティーが伴う課題の設定とした。

講座の各回の内容等については下記表を参照いただきたい。（寺沢和洋）



| 回 | 内 容                                    | 担当（敬称略）                                                                        |
|---|----------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------|
| ① | 20 歳の現状把握、学生の立ち位置、金融リテラシーの本質<br>本講座の取説 | 教養研究センター・医学部・寺沢和洋                                                              |
| ② | 財務諸表の読み方、個人の財務諸表                       | 税理士・会計士・不動産鑑定士・西本隆文（塾員）                                                        |
| ③ | 金融・経済・市況の概要・新聞の読み方                     | 教養研究センター・小林健一                                                                  |
| ④ | 税金（所得税・相続税・贈与税）、確定申告                   | 税理士・会計士・不動産鑑定士・西本隆文（塾員）                                                        |
| ⑤ | マネープランの基礎と金融資産についての概況                  | （株）三井住友銀行・三田通支店長・牛丸綾子                                                          |
| ⑥ | 株式（市場）全般について                           | SMBC 日興証券（株）・千賀恒広                                                              |
| ⑦ | 現物資産について（不動産、他）                        | 教養研究センター・医学部・寺沢和洋                                                              |
| ⑧ | 不動産登記簿謄本（登記）の読み解き方                     | 司法書士・種本里紗（塾員）                                                                  |
| ⑨ | 生保・損保（社会・介護・失業保険）                      | J-FLEC・村岸理美                                                                    |
| ⑩ | 企業 IR・企業戦略                             | 室町殖産（株）・代表取締役社長・山下剛史                                                           |
| ⑪ | FP による解説・お金の悩み・事例・解決法（各状況・各世代）         | 教養研究センター・小林健一                                                                  |
| ⑫ | トラブルと解決策                               | SMBC コンシューマーファイナンス（株）・辻谷美由紀                                                    |
| ⑬ | 副業・起業・特許                               | 医学部・井上浩義                                                                       |
| ⑭ | 全体の総括、ディスカッション、キャリアパス事例                | （株）三井住友銀行・日野岳衛、司法書士・種本里紗（塾員）、教養研究センター・法学部・片山杜秀、教養研究センター・小林健一、教養研究センター・医学部・寺沢和洋 |
| 補 | 株式投資・超入門                               | 教養研究センター・医学部・寺沢和洋                                                              |

## 2 実験授業

## 2-1 庄内セミナー

2024年度は台風により中止した庄内セミナーだったが、2025年度は催行できた。8月29日から9月1日まで「庄内に学ぶ生命（いのち）―死と生を繋ぐ」をテーマに、慶應義塾高等学校より5名、慶應義塾大学の6学部・1研究科より14名の計19名の参加者が教職員6名と庄内の地に赴いた。幸い現地でご準備頂いた熊スプレーの出番は無く、全行程を無事に終えた。

初日は鶴岡市役所にご用意いただいたバスで慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）に移動し、5つの班ごとに「生」「死」あるいは「生命」といったことばを起点にマインドマップを作成した。夜は休暇村羽黒で東山昭子先生の講演を伺い、庄内で大切にされている考え方を表す表現、そして庄内を代表する詩人の吉野弘の詩に宿ることばの力について学んだ。香り高いだだちゃ豆の生産者の佐藤莊洲様にもお会いした。

2日目は南岳寺で即身仏を拝観し、榎本肇子様より、明治の代に即身仏となった鉄竜海上人について伺い、慶應義塾高等学校の古川晴彦先生からは即身仏になるということの社会的かつ精神的背景について伺った。その後日本で唯一の黒いマリア像を擁する鶴岡カトリック教会を見学した。衆生を救い続けるために、即身仏になることを選んだ住職の生き方と、その凄烈な祈りの室の上に建っている南岳寺本堂。一方で、救い主イエスをこの世に届けその奇蹟を見守り続けたマリアの生き方と、黒いマリア像を安置するロマネスク様式の聖堂。「永遠の平安を祈り続ける」ということの極端に異なるかたちが鶴岡に存在することを知った。

昼食は知憩軒で長南 光様の心づくしのお料理を頂き、土地の食材への揺るぎない信頼を感じとった。庄内藩校致道館では、その昔藩主がお入りになった御入間にて、庄内酒井家第18代当主酒井忠久様よりご挨拶を賜った。そして慶應義塾高等学校の



慶應義塾大学教養研究センター主催

## 第14回 庄内セミナー

いのち  
庄内に学ぶ「生命」―死と生を繋ぐ―

庄内セミナーは、慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）がある山形県鶴岡市を拠点として開催する生命をテーマにした体験型セミナーです。修験体験、即身仏拝観、庄内輪語祭、TTCK先端生命科学研究所ラボ見学、講義と対話、地元との交流を通して庄内地方の歴史、文化、自然を体感して「生命」をめぐる幅広い「学び」を体験します。

期間：2025年8月29日（金）～9月1日（月）3泊4日  
場所：山形県鶴岡市（鶴岡タウンキャンパス他）  
定員：20名程度 対象：慶應義塾大学学部生・大学院生  
参加費用：10,000円 ※現地までの交通費は自己負担。現地集合・現地解散です。

■参加申込・募集期間  
5月7日（水）～6月20日（金）正午  
■参加申込・募集期間  
<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/shonai/>  
■参加者事前講習会・説明会  
8月1日（金）13:00～15:00（予定）  
来往各1階シンポジウムスペース

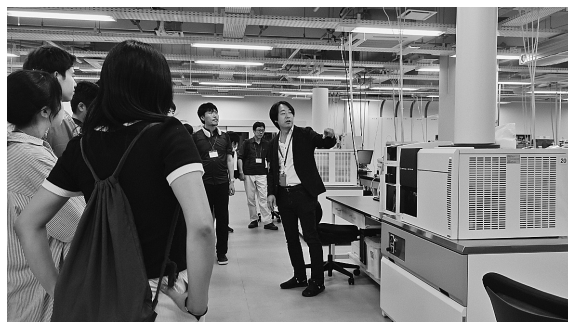
修験体験：羽黒山にて  
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

鳥海奈都子先生より、朱子学の流れを汲む「論語」と徂徠学の流れを汲む「庄内論語」について伺い、庄内論語の素読を先導して頂いた。藩校致道館の生田浩樹様からは、200年以上前の致道館教育の方針である「一人一人の良い所を伸ばす」教育のご説明があった。続いて慶應義塾大学先端生命科学研究所では、荒川和晴所長に、生命科学者として生と死という状態についてご講演頂き、ラボ棟をご案内頂いた。

3日目は修験体験である。「今日の修験体験を一過性のイベントにしないで」という吉住弘幸先達の言葉を心に留め、「受けたもう」の意味をかみしめて進んだ。修行の所作は学生たちに強い印象を残したようだった。先達の吉住様、渡邊孝之様、中野雄一郎様に感謝する。夜の八朔祭では、厳しい修行を経た







山伏たちの熱気が出羽三山神社を満たしていた。

最終日は、5つの班が、生・死・生命に向き合い激論を交わした結果を TTCK で発表した。聞き応え十分で、質疑も活発だった。そして松が岡のシルクミライ館で、鶴岡シルク株式会社の大和匡輔様に、鶴岡の「絹」生産の歴史を今日の経済・環境と結びつけてお話し頂いた。最後に美しい葡萄畑を見

ながらピノ・コッリーナでの懇親会で締めくくった。酒井忠久様、鶴岡市長皆川治様、鶴岡市役所政策企画課の皆様、早坂剛様、鶴岡各所でお世話になった皆様、そして見守ってくれたお山に深く感謝している。

(鈴木亮子)

## 2 実験授業

## 2-2 情報の教養学

「情報の教養学」は、近年の高度情報化社会の急速な発展における最新の話題を提供することを目的とした講演シリーズである。2025年度は、春学期に3件、秋学期に3件の講演を実施した。

春学期では、まず、福井健策氏（弁護士）が「わたしの声はわたしのもの？わたしの顔はわたしのもの？～デジタルレプリカの法律学入門」という題目で講演した。近年のAIが生成する画像や動画などのコンテンツの中には、無断で本物を模倣し公開されているが、著作権や肖像権などの権利がどのように適用されるのか、問題はどこにあるのかなどを議論した。次に、太田雅文氏（東急総合研究所 フェロー）は、「TODによるサステナブルな田園都市」という題目で講演した。TOD（公共交通機関に基づいた都市づくり）そのものの考え方から始め、東急沿線でのようにそれを行ってきたのか、「サステナブル」の観点から今後どう考えるべきかなどを議論した。最後に、伊藤公平塾長は、「慶應義塾で学ぶこと」という題目で講演した。歴史は自分がとるべきスタンスの参考になると述べ、10～20代こそじっくりと考え、知識やいろいろな考え方を身につける時期であると説き、読む力や書く力の重要性について述べた。

秋学期では、まず、山中祥太氏（LINE ヤフー（株）LINE ヤフー研究所上席研究員）は、「使いやすいユーザインタフェースのデザインを理論的に研究する」という題目で講演した。2025年の大学入学共通テストの問題をUIの理論的研究の観点から解説し、さらに、スマホアプリのボタンをタップするときの成功率を推定する自身の研究およびそのツール Tappy を紹介した。次に、山本龍彦氏（法務研究科教授）は、「AI×アテンション・エコノミーと人間の尊厳—SNSはあなたを幸福にしていますか？」という題目で講演した。SNSは、依存症のような状態を作り出すことにより「時間」を払っており、知らず知らず思考の弱体化につながるなど危険を述べた。そして「情報的健康」が重要になってくると説いた。最後に、高道慎之介氏（理工学部准教授）は、「音のAIを知り人間を知ろう」という題目で講演した。音を対象にAIを活用した

わたしの声はわたしのもの？  
わたしの顔はわたしのもの？  
～デジタルレプリカの法律学入門～

AIによる音声の模倣、画像や動画などの生成画像の模倣など、近年、AIが生成するコンテンツの中には、無断で本物を模倣し公開されているが、著作権や肖像権などの権利がどのように適用されるのか、問題はどこにあるのかなどを議論した。

事前申込制  
https://bit.ly/31nuH

4月16日(水)  
16:30～18:00 福井健策

講師：福井健策  
慶應義塾法律事務所 弁護士  
講演：「わたしの声はわたしのもの？わたしの顔はわたしのもの？～デジタルレプリカの法律学入門～」

TODによる  
サステナブルな  
田園都市

東急沿線都市「サステナブル」田園都市の発展。公共交通機関に基づいた都市づくり（TOD）による持続可能な都市づくり。TODによる「持続可能な都市づくり」の観点から、今後の都市づくりのあり方を考える。

事前申込制  
https://bit.ly/4bAZ66n

5月14日(木)  
18:10～19:40 太田雅文

講師：太田雅文  
東急総合研究所 フェロー  
講演：「TODによるサステナブルな田園都市」

慶應義塾で  
学ぶということ

7月9日(水)  
16:30～18:00 伊藤公平

講師：伊藤公平  
慶應義塾 塾長  
講演：「慶應義塾で学ぶこと」

使いやすい  
ユーザインタフェースの  
デザインを理論的に  
研究する

使いやすいユーザインタフェースのデザインを理論的に研究する。最新の研究成果を基に、使いやすいデザインを実現するための理論的なアプローチを学ぶ。

事前申込制  
https://bit.ly/4bYfPeG

10月22日(水)  
16:30～18:00 山中祥太

講師：山中祥太  
LINE ヤフー 研究所 上席研究員  
講演：「使いやすいユーザインタフェースのデザインを理論的に研究する」

AI×アテンション・エコノミーと  
人間の尊厳  
—SNSはあなたを幸福にしていますか？—

多くのSNSは無料で利用できますが、実はあなたが知らず知らずのうちに「時間」を払っている。SNSの仕組みと、それが人間の尊厳に与える影響について考える。

事前申込制  
https://bit.ly/4bAZ66n

11月5日(水)  
16:30～18:00 山本龍彦

講師：山本龍彦  
法務研究科 教授  
講演：「AI×アテンション・エコノミーと人間の尊厳—SNSはあなたを幸福にしていますか？」

音のAIを知り  
人間を知ろう

音は人間の感情や思考を反映している。AIによる音声分析を通じて、人間の感情や思考を理解する。

事前申込制  
https://bit.ly/4bYfPeG

12月3日(水)  
16:30～18:00 高道慎之介

講師：高道慎之介  
理工学部 准教授  
講演：「音のAIを知り人間を知ろう」

具体的な研究例を複数とりあげ、それらが人間や文化の拡張や、人間の知覚への介入や模倣との関係について解説した。

いずれの講演も参加者は興味深く聴講し、質疑も活発でした。春・秋の講演の一部の動画は、下記の情報の教養学のホームページから視聴できる。

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/information/>  
(高田眞吾)



## 2 実験授業

### 2-3 みなさん mirai プロジェクト

教養研究センターを拠点に、慶應義塾未来先導基金・南三陸プロジェクト「自然の中で考える生命、社会の未来—我々は何ができるのか—」の活動（3年目）。本プロジェクトは東日本大震災を経験した南三陸町にある慶應最大の学校林をベースに、キャンパスにはできない学びをする場を目指す。本年度も森林と災害をテーマに自然災害を自分事として考え、命、生きるということ、そして我々の未来をどう作るべきかを、参加者に問いかけた。

具体的な活動は、事前学習、合宿、学習結果を共有する成果報告ミーティング、学習会、学生による活動報告会など。連合三田会で南三陸に関わってきた先輩たちとの交流を行った。また、社会・地域連携の協力で、南三陸の間伐材で昨年度試作したペン・杉・葉っぱをかたどったキーホルダー型のチャーム三種が慶應公式グッズとして販売された。詳細は「活動報告 2025」にまとめた。

#### ◇メンバー教員：

岡田英史（理工学部・常任理事）、奥田暁代（法学部・常任理事）、青木淳一（法学部）、有川智己（経済学部）、井奥洪二（経済学部）、植田浩史（経済学部）、大平哲（経済学部）、糟谷大河（経済学部）、津田眞弓（代表・経済学部）、戸部真澄（法学部）、丹羽雄一（経済学部）

#### ◇学生参加者：22名

#### ◇アドバイザー：

長沖暁子（元経済学部）、本行正実（塾員）、小野竜史（法学部）

#### ◇主な活動内容：

- 6月14日（土）13：30～15：00 参加者説明会
- 6月14日（土）15：30～17：00 福澤育林友の会主催講演会参加  
題目：「南三陸慶應の森の自然環境と植物相」  
講師：一ノ瀬友博氏（環境情報学部）
- 7月1日（火）18：15～20：00 事前学習会  
ミニ講義：糟谷大河、丹羽雄一、植田浩史  
提案：戸部真澄、井奥洪二、大平哲、有川智己、津田眞弓
- 8月8日（金）～8月11日（月）南三陸合宿研修  
これまでの学生が調査・プランを立てた研修先に加え、今年度は初めて女川原子力発電所へ。
- 8月18日（月）18：15～20：00 成果報告ミーティング



- 9月23日（火）10：00～12：00 放射能についての特別講義 講師：井奥洪二
- 9月29日（月）18：15～20：15 基調講演＋活動報告＋ディスカッション  
活動報告：「語られざる震災の記憶。復興と克服のあいだで…」  
基調講演：初木佑介（NHK 政経・国際番組部ディレクター、元慶應義塾・南三陸プロジェクト）「〈問い〉は現場（フィールド）で生まれる」

#### ◇WEBサイト：

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/minasanmirai/>

#### ◇活動報告書：

[https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/minasanmirai/2025/PDF/activity\\_report\\_2025.pdf](https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/minasanmirai/2025/PDF/activity_report_2025.pdf)

（津田眞弓）

## 2 実験授業

### 2-4 エンターテインメントビジネス特論



2025 年度秋学期に実験授業「エンターテインメントビジネス特論：日本アニメの次の 10 年を展望する」を実施した。現代日本のエンターテインメントビジネスの中でも中心的な存在であるアニメビジネスに特に焦点を当て、その「次の 10 年」を展望するもので、2026 年度から開始する寄附講座の準備段階として位置づけられている授業である。

研究者による講義（三原龍太郎・経済学部准教授）に加えて、アニメビジネスの最前線で活躍する実務家からも数多くのゲスト講義を得ることができ

た。具体的には、平澤直氏（アーチ株式会社代表取締役・創業者）、谷口悟朗氏（アニメーション監督）、竹内文恵氏（アスミック・エース）、小形尚弘氏（バンダイナムコフィルムワークス）からゲスト講義が行われた。

毎回の授業では出席者と登壇者の間で活発な議論が交わされ、非常に満足度の高い内容となった。

- ① 10 月 1 日 アーチ株式会社代表取締役・創業者 平澤直氏特別講演（総論）
- ② 10 月 22 日 アーチ株式会社代表取締役・創業者 平澤直氏特別講演（各論）
- ③ 10 月 29 日 日本のアニメビジネスとアジア：中国・インド・サウジアラビア（三原龍太郎・経済学部准教授）
- ④ 11 月 12 日 アニメビジネス実務家ゲスト講義  
①：谷口悟朗氏（アニメーション監督）
- ⑤ 12 月 10 日 アニメビジネス実務家ゲスト講義  
②：竹内文恵氏（アスミック・エース）
- ⑥ 2026 年 1 月 7 日 アニメビジネス実務家ゲスト講義③：小形尚弘（バンダイナムコフィルムワークス）
- ⑦ 2026 年 1 月 14 日 総合討論（平澤直氏・三原龍太郎経済学部准教授・山下一夫理工学部教授・吉川龍生経済学部教授）

※掲載の情報は、教養研究センター Web サイト公開当時の情報に基づいています。

（三原龍太郎）



## 3「学び場」プロジェクト

慶應義塾のホームページを眺めてみる。義塾の理念を、重要語句を集めて解き明かしてゆく画面が見つかる。そこに「独立自尊」や「気品の泉源」などと共に並んでいるのが「半学半教」だ。「教える者と学ぶ者との師弟の分を定めず、先に学んだ者が後で学ぼうとする者を教える。教員と学生も半分は教えて、半分は学び続ける存在という、草創期からの精神です」。1871（明治4）年、慶應義塾は新銭座から三田二丁目に移った。そのとき、真っ先に福澤諭吉先生が作ったのが「慶應義塾社中之約束」。先生は記す。義塾の学問とは特定の師匠を崇め奉るようなものではない。確かに福澤諭吉が創始者であり中心的教員であるには違いない。が、かといって、福澤本人でないと教えられない特別な秘儀や秘伝があるわけではない。福澤先生はカリスマ的家元ではない。ただ「博く洋書を読み、或は其文を講じて人に伝へ、或は之を翻訳して世に示すのみ」。「文明開化」に必要な西洋の書物を読むことができ、それを日本語にして、内容を噛み砕いて伝える。そういう授業ができれば、福澤先生に限らず誰でも教師になれる。生徒もそうなれるように勉めればよい。もしも生徒の学びが捗って、在学中に同輩後輩に手ほどきできるようになれるなら、生徒が教師を兼ねても一向に差し支えない。「今日人に学ぶも明日は又却て其人に教ることあり」。誰が生徒でも教師でも構わない。「故に師弟の分を定めず、教る者も学ぶ者も、概してこれを社中と唱ふるなり」。慶應義塾に限らず、塾というものの学びのスタイルとはそういうものであったろう。

この「半学半教」の理念を現代の日吉キャンパスに蘇らせようとするのが「学び場プロジェクト」。教養研究センターと日吉メディアセンターによる共同事業であり、教養研究センターの設置科目と連動している。原則としては「アカデミック・スキルズ」の既履修者である学生から選抜し、非常勤職員として日吉の図書館の1階に設けられている学習相談のカウンターに座ってもらい、訪れる学生に対して、レポートの書き方やノートの取り方などを教える。それは「アカデミック・スキルズ」の内容に通じることで、つまり、「アカデミック・スキルズ」

レポートの筆、止まってしまったら…

日吉メディアセンター

# 学習相談

…その悩み、先輩に相談してみませんか？

各種メディアで情報発信中！

2025.04

**新入生 必見！**

・そもそも課題に何を書けばいい？  
・レポートの構成って？  
・資料の使い方がわからない…  
・参考文献/注の使い方を知りたい  
・伝えるプレゼン方法は？  
学生相談員が、同じ学生目線でアドバイスします！

◇実施日時: 2025年 4/14(月)～7/25(金)  
◇場所: 日吉図書館1階 スタディサポート  
直接カウンターまでお越しください！  
Webサイトよりご予約も受け付けます。

お問い合わせ: mc-hys-ref@adst.keio.ac.jp  
共催: 日吉メディアセンター・教養研究センター・日吉学生部

という授業で履修者の獲得したスキルを、学習相談の窓口を通じて、より多くの学生に伝授してもらおうとする試みである。

2025年度の学習相談員の内訳は次の通り。学部4年が文学部2人、経済学部1人、商学部3人、理工学部1人。学部3年が経済学部2人、商学部1人、理工学部2人。学部2年が文学部3人、経済学部2人、法学部2人。総計19人。相談期間は春学期と秋学期を合わせて135日間で、相談件数は143件であった。疫病流行期が明けてから2023年度までは相談件数は増加傾向にあったが、2023年度は258件、2024年度は228件であったことを考えると、2025年度は大幅に減少していると言わざるを得ない。理由は種々考えられるが、ひとつには、AIによる文章の自動生成環境の普及と性能の飛躍的向上、およびそれに伴う大学教育の中でのレポートの役割の変化が挙げられるであろう。「半学半教」の仕組みにも改革が求められる時期なのかもしれない。

(片山杜秀)



# 1 日吉行事企画委員会 (HAPP)

日吉行事企画委員会（HAPP）は、日吉のキャンパス内外のコミュニティーにさまざまな共有の場を提供する、もしくは新入生を歓迎することを目的とした行事を委員会で企画し、春および秋学期においてそれらを催している。また、秋学期においては、塾生および教職員から企画を公募し、審査を経て採択した催し物を主催している。なお、委員会で企画したイベントは、継続性を有するイベントを優先して開催している。

2025年度のHAPPは、例年通り複数の企画を主催し、公募企画1つを含む計7種類の催し物を行った。これらには、毎年恒例となっている、舞踏公演、著名者による講演会、複数回の演奏会が開催される「日吉音楽祭」および日吉メディアセンターでのライブラリーコンサートなどが含まれていた。今年度の企画公募においては、審査の結果、「新人Hソケリッサ！ことぶき多世代プロジェクト」が採択された。ここでは、ダンサーであるアオキ裕キと、路上生活者および元路上生活経験者で構成されたダンスグループによる、ダンスを主とした肉体パフォーマンスが行われた。また同時に、彼らの活動を紹介する記録映像の上映、および主宰者を招いての座談会も行われた。

HAPPが主催する企画については、何らかの記

録を残してきてはいるが、すべての催し物が、例えば映像記録として存在しているわけではない。これについては、今後改善の余地があり、将来的な課題として捉える必要があるかもしれない。2020年に新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大が見られた際、YouTubeを介したライブ配信を行った企画もあった。これには利点があり、録画された映像ファイルをそのままYouTube上に残しておくことができ、アーカイブ化することが容易であった。しかしながら、配信には一定の手間と予算が必要であり、2025年度にライブ配信を継続して行った企画は、「日吉音楽祭 2025」として開かれた2つの演奏会のみとなった。

2025年度のHAPP主催・企画の企画は、次であった：1）講演会「福澤諭吉と北里柴三郎—近代史上の慶應医学部—」（5月10日）、2）図書館で行われたライブラリーコンサート（5月14日と16日の計2公演）、3）アートセンターとの共催企画、「今貂子舞踏公演『彗星』」（5月21日）、4）日吉音楽学研究室による、「日吉音楽祭 2025」の枠組みで行われた演奏会2つ（7月12日および13日）、5）4年目となった、松下里沙子氏によるワークショップとレクチャー「ジェンダーレスなインプレッションメイク」（12月5日）、そして6）教養

## 2025年度 実施企画一覧

| No. | 企画名                                                               | 日程                              |
|-----|-------------------------------------------------------------------|---------------------------------|
| 1   | 福沢諭吉と北里柴三郎—近代史上の慶應医学部—                                            | 5月10日（土）                        |
| 2   | ライブラリーコンサート 2025                                                  | 弦楽四重奏：5月14日（水）<br>Jazz：5月16日（金） |
| 3   | 新入生歓迎行事 今貂子舞踏公演『彗星』                                               | 5月21日（水）                        |
| 4   | 日吉音楽祭 2025                                                        | 7月12日（土）、13日（日）                 |
| 5   | 新入生歓迎行事 ジェンダーレスなインプレッションメイク                                       | 12月5日（金）                        |
| 6   | 新入生歓迎企画／教養の一貫教育 Vol.11「永井荷風文学賞リレー講演会」1<br>田中純氏×松浦寿輝氏×朝吹亮二氏        | 12月12日（金）                       |
| 7   | 「新人Hソケリッサ！ことぶき多世代プロジェクト」<br>SUPER STRANGER 新人Hソケリッサ！慶應義塾大学パフォーマンス | 2026年1月21日（水）                   |



「フォーマンス」と題されたイベントであった（2026年1月21日）。

HAPP 全般については、HAPP の Web サイト (<https://happ.hc.keio.ac.jp/>) をご覧いただきたい。

（石井 明）



  
**福澤元諭吉と北里柴三郎**  
 新入塾進行会

**北里柴三郎の苦悩に**  
 ―近代史上の虎胆医学者―



**医学者としての宣言との衝突!**  
 福澤もめく宣言との衝突!

**日本の学問のあり方をめぐる論議**  
**手をつきし伸べた福澤諭吉**

**都倉武之**  
 虎とくもくした学問

**2025年 5月10日**

14:00～16:00  
 (13:30開場)

池田義典大学直会キャンパス 第3講座 シンポジウムスーム

**無料・どなたでも参加ください**  
 参加費・観覧料はご自身から (無料席)  
 申し込みは不要です。 (要予約)

<https://forms.gle/3Wp3t3333333333333333>

**申し込み** 申込書・申込票を提出し、申込金をお支払い  
 池田義典大学直会キャンパスにて受付

**当日** 当日受付 当日受付

**当日** 当日受付 当日受付

**講師** 都倉武之  
 池田義典大学直会キャンパスにて受付

**講師** 都倉武之  
 池田義典大学直会キャンパスにて受付

**講師** 都倉武之  
 池田義典大学直会キャンパスにて受付

**当日** 当日受付 当日受付

**当日** 当日受付 当日受付

**当日** 当日受付 当日受付

**当日** 当日受付 当日受付

**当日** 当日受付 当日受付

**当日** 当日受付 当日受付

應援義塾大学教養研究センター Hiyooshi Art & Performance Project (HAPP)  
 日吉図書館  
**LIBRARY CONCERT 2025**  
 AT HIYOOSHI LIBRARY

**5.14** Wed.15:00 ~

**Quartet**



1st Violin  
本庄 尚子



2nd Violin  
上倉 亜子



1st Viola  
茂木 奈津子



Cello  
加藤 陽子

**5.16** Fri.15:00 ~  
17:15 ~

**Jazz**



Hammond Organ  
土田 昭信



Guitar  
鈴木 正



Drums  
月野 哲人

予約不要・入場自由(学内者・図書館入館資格のある方)  
 No reservation required / Only Persons eligible for admission to the library  
[https://libguides.lib.kio.ac.jp/hys\\_events/2025libcon2025](https://libguides.lib.kio.ac.jp/hys_events/2025libcon2025)


主 催：順天聖学院大学教養研究センター・日吉市文化財団・HAPP / 日吉図書館  
 問合せ：日吉メディアセンター Email: mc-hys-ref@kio.ac.jp

[illegible]

# 彗星

今貂子 舞踏公演

**2025年5月21日(水)**  
【18時開演・17時30分開場】

**慶應義塾大学日吉キャンパス  
 来往舎イベントテラス**

横浜市青島区日吉4-1-1  
 慶応義塾大学 来往舎1階 来往舎待合室・  
 横浜市営地下鉄日吉駅南口 日吉駅下車

Kaio University Hiyoshi Campus, Raitohsai  
 4-1-1, Hiyoshi, Kohoku-ku, Yokohama-shi  
 Access from Hiyoshi Station (Shinjuku-Tokaido Line /  
 Tokaido Main Line / Tokaido Shinkansen Line /  
 Yokohama Municipal Subway Green Line)

**入場無料**  
 Admission free

\*観覧券は必要ありません  
 \*観覧券は必要ありません

——輝々と光りを放ち、他のような尾を引いてやってくる彗星。  
 舞臺に出会った時、まるで彗星のようだった。  
 輝びふる、勢いよく遊ぶする彗星の尻尾を掴み、宇宙を一周。  
 輝が満ちる。再び彗星がやってくる。  
 満ちから溢れ出し創造力、未来を孕する想像力を繰り上げと運んで

[illegible][illegible][illegible]

## 2 日吉キャンパス公開講座

2025年度の「日吉キャンパス公開講座」は前身の「横浜市民大学講座」から数え51回目となり、10月4日から11月29日までの日程で開催した。統一テーマについては、4月14日に実施の公開講座運営委員会にて、委員長の素案を元に議論の結果、「自然と人工」に決定した。講師陣についても、委員長の素案に各委員からの提案も加え、委員会として候補者リストを作成、順次講演依頼を行い、後述の表のような陣容とした。

開催にあたり、テーマ概要として示した文章は以下の通りである（この部分のみ原文のままとするため、丁寧語で記すこととする）。

学校で国語の時間に「自然の反対は人工」と習います。端的に言えば、自然は「人間の手が加えられていない物、状態」を指し、人工は「人間によって作られた物、状態」という意味合いで使われます。

「人工」を悪い意味で使う場合もあります。人間は、人工物、或いは人工物を作るプロセスにより、自然を破壊し環境汚染を引き起こしてきました。このことは、コロナ禍で経済活動や生産活動が停滞した結果、実際に、大気汚染や河川等の水質が改善し、自然が戻ってきた、という事実からもうかがい知ることができます。ここでは「自然」と「人工」

## 自然と人工

2025年  
10月4日(土)  
▼  
11月29日(土)

学校で国語の時間に「自然の反対は人工」と習います。端的に言えば、自然は「人間の手が加えられていない物、状態」を指し、人工は「人間によって作られた物、状態」という意味合いで使われます。「人工」を悪い意味で使う場合もあります。人間は、人工物、或いは人工物を作るプロセスにより、自然を破壊し、環境汚染を引き起こしてきました。このことは、コロナ禍で経済活動や生産活動が停滞した結果、実際に、大気汚染や河川等の水質が改善し、自然が戻ってきた、という事実からもうかがい知ることができます。ここでは「自然」と「人工」を二項対立的に扱っています。

そもそも人間は、極寒、酷暑に限らず、気温・天候の変化に伴う過酷な自然環境を生き抜いてきました。「人工（物）」は、台風や地震などの自然現象を乗り越えて、人間が生きていくための術であり、これが「人工」の命脈という方を考えてみましょう。一方で、人間が自然と対峙します。人間は自然の一部であるという考え方や、自然と人工が入り混じったもの一つの要素として捉えることもできるでしょう。例えば、土壌の肥沃さ、樹の成長、気候等は、人工の力が自然の営みを変える、いわば自然と人工が組み合わさった事例とも言えます。

また、芸術や科学で人工的に自然を再現しようとするとき、どれくらい再現が可能なのかという点、何をどうやって作るのか、これも「自然と人工」の興味深い問いかけです。

そういえば、「人工衛星」という言い方がありますが、気象衛星を「人工衛星」とは言いません。日常的に使っている言葉も、意識してみると、いろいろな疑問が湧いてきます。

そんな「自然と人工」にまつわる疑問を広範囲な分野から集めたのが、本年度の公開講座です。様々な疑問、向き合いと問いを考察していればと考えるています。

| 講座内容         |                                           | ①3時限目 (12:00～14:30)                              | ②4時限目 (14:45～16:15) |
|--------------|-------------------------------------------|--------------------------------------------------|---------------------|
| 10/4<br>(土)  | 挨拶 (12:35～12:40)                          | 奥田健代<br>慶應義塾大学名誉教授                               |                     |
|              | 趣旨説明(12:40～12:50)                         | 寺沢和洋<br>慶應義塾大学文学部教授<br>「幕末浮世絵師の事例より」             |                     |
| 10/25<br>(土) | ① 自然と人工で考える、身体活動・運動・スポーツと健康               | 内藤正人<br>慶應義塾大学アート・センター所長<br>慶應義塾大学スポーツ医学研究センター教授 |                     |
|              | ② 女性型人間が登場する<br>フィクションから女性の人工美を考える        | 新島進<br>慶應義塾大学経済学部教授                              |                     |
| 11/8<br>(土)  | ① 「地球」/「地表」を描く「地図」<br>—「地図の力」と「地図のレトリック」— | 太田弘<br>日本地図学会副会長<br>慶應義塾大学経済学部教授、学術博士            |                     |
|              | ② アオウミウシを育ててみた！<br>—自然を感じ、観察する—           | 林牧子<br>慶應義塾大学経済学部助教                              |                     |
| 11/15<br>(土) | ③ 物質・材料と自然・人工                             | 井奥 洪二<br>慶應義塾大学経済学部教授<br>慶應義塾大学科学研究教育センター元所長     |                     |
|              | ④ 米大陸を放射能汚染から救った菌の抜けた子どもたちの物語             | 伊東英朗<br>ドキュメンタリー映画監督                             |                     |
| 11/29<br>(土) | ⑤ 資源植物×科学技術が切り拓く、持続可能なゴムの未来               | 栗原恵美子<br>慶應義塾大学商学部助教                             |                     |
|              | ⑥ 再生医療の現状と未来<br>—iPS細胞を用いた神経難病への挑戦—       | 岡野 栄之<br>慶應義塾大学再生医療リサーチセンター教授/センター長              |                     |

※やむを得ない事情により、講座内容・講演者・日程の変更、あるいは講座自体が休講となる場合があります。

**募集要項**

募集対象 社会人ほか

募集定員 350名 ※先着順受付、定員に達し次第、受付を終了させていただきます。

会場 慶應義塾大学日吉キャンパス内

受付期間 2025年9月1日(月)10時～9月17日(水)17時まで

受講料 10,000円(全5日)

申込方法 教養研究センターホームページからお申し込みください。

申込受付 申し込み受付時に、申込内容をお知らせします。受講料の納入をもって受講登録となります。お申し込み後、お申し込みの状況を確認いたします。

特 別 期間中、日吉図書館をご利用いただけます。(貸し出しは不可。)全5日中、3日以上出席の方に限り延び延びお借りいただけます(慶應義塾大学教養研究センター「書籍」欄を参照)いたします。

●個人情報を扱う  
慶應義塾大学教養研究センター主催「日吉キャンパス公開講座」受講にあたってお知らせしたい個人情報は、「日吉キャンパス公開講座」を含むセンターからのお知らせのみに利用し、慶應義塾大学及び関連団体の関係者以外に提供することはありません。個人情報は、「慶應義塾大学個人情報保護方針」および「慶應義塾大学個人情報保護規程」に基づき扱います。

個人情報保護方針  
<https://www.keio.ac.jp/privacy-policy/>

慶應義塾大学個人情報保護方針  
<https://www.keio.ac.jp/ja/assets/download/privacy-policy/index?ref=privacy-regulations.pdf>

慶應義塾大学教養研究センター  
URL: <https://lib-arts.hc.keio.ac.jp>

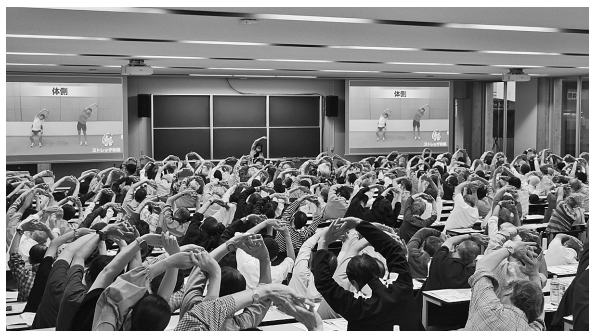
申込フォーム  


を二項対立的に扱っています。

そもそも人間は、極寒、酷暑に限らず、気温・天候の変化に伴う過酷な自然環境を生き抜いてきまし

| 講義日         | 講 師                                          | テーマ                                     |
|-------------|----------------------------------------------|-----------------------------------------|
| 10月 4日 (土)  | 3時限目 内藤 正人 (慶應義塾大学文学部教授<br>慶應義塾大学アート・センター所長) | 北斎とサイエンス<br>—幕末浮世絵師の事例より—               |
|             | 4時限目 小熊 祐子 (慶應義塾大学スポーツ医学研究センター教授)            | 自然と人工で考える、身体活動・運動・スポーツと健康               |
| 10月 25日 (土) | 3時限目 新島 進 (慶應義塾大学経済学部教授)                     | 女性型人間が登場する<br>フィクションから女性の人工美を考える        |
|             | 4時限目 太田 弘 (日本地図学会評議員、元慶應義塾普通部教諭、学術博士)        | 「地球」/「地表」を描く「地図」<br>—「地図の力」と「地図のレトリック」— |
| 11月 8日 (土)  | 3時限目 林 牧子 (慶應義塾大学経済学部助教)                     | アオウミウシを育ててみた！<br>—自然を感じ、観察する—           |
|             | 4時限目 井奥 洪二 (慶應義塾大学経済学部教授<br>自然科学研究教育センター元所長) | 物質・材料と自然・人工                             |
| 11月 15日 (土) | 3・4時限目 伊東 英朗 (ドキュメンタリー映画監督)                  | 米大陸を放射能汚染から救った菌の抜けた子どもたちの物語             |
| 11月 29日 (土) | 3時限目 栗原恵美子 (慶應義塾大学商学部助教)                     | 資源植物×科学技術が切り拓く、持続可能なゴムの未来               |
|             | 4時限目 岡野 栄之 (慶應義塾大学再生医療リサーチセンター教授/センター長)      | 再生医療の現状と未来<br>—iPS細胞を用いた神経難病への挑戦—       |





小熊祐子氏講義風景



井奥洪二氏



林牧子氏



伊東英朗氏講義風景

た。「人工（物）」は、台風や地震などの自然現象を乗り越えて、人間が生きるための術であり、これが「人工」の原点だという見方もできるでしょう。

一方で、人間を自然と対峙させず、人間も自然の一部であるという考え方や、自然と人工が入り混じったものを一つの要素として捉えることもできるでしょう。例えば、生命の誕生、個の成長、医療等は、人工の力が自然の営みを支える、いわば自然と人工が組み合わさった事例とも言えます。

また、芸術や科学で人工的に自然を表現しようとするとき、どれくらい再現が可能なのでしょうか。何をどうがんばっても全く不自然で、非現実的なものにしかなりえないのか。これも「自然と人工」の興味深い対比と言えそうです。

そういえば、「人工衛星」という言い方はしますが、冷凍庫の水を「人工氷」とは言いません。日常的に使っている言葉も、意識してみると、いろいろと発見がありそうです。

そんな「自然と人工」にまつわる話題を広範な分野から集めたのが、本年度の公開講座です。様々な

話題、角度から皆様と共に考察していければと考えています（テーマ概要はここまで）。

各実施日・講演タイトル・講演者については別表・ポスターを参照いただきたい。

受講申し込みについては web 経由のみというコロナ禍の手法を踏襲し、受講者はほぼ定員の 346 名となった。2025 年度より受講料の値上げを実施し、その影響が懸念されたものの、例年と同水準の受講者数となった。受講生からのアンケート結果としては、94%から「満足」との回答を得ることができ、過去最高水準となった。今後もアンケート等の意見を参考に、改善できる点は積極的に改善し、トレードオフとなる要素については慎重に検討し、魅力ある統一テーマの設計に尽力し、日吉キャンパス・慶應義塾の特徴を大いに活かし、身近なテーマから大学の先端の研究開発の話題まで、分野横断的な講座を今後も実施していきたいと考えている。

（寺沢和洋）

## 3「創造力とコミュニティ」 研究会

### —持続可能性の創造力

「創造力とコミュニティ」研究会は、本年度で7年目となる最終年度を迎えた。本研究会ではこれまで、「創造力」と「コミュニティ」という二つのテーマを軸に、人と人、人と自然、そして社会との関わりについて多角的に考察してきた。最終年度となる本年度は、過去六年間の総括として、「持続性」をキーワードに据え、自然との共存や他者との共存を志向しながらコミュニティづくりや創造的活動を実践している人々を招き、研究会を開催した。また昨年度に引き続き「持続可能性」を大きなテーマとしながら、本年度は特に「消費」という視点を重視した。ここでいう消費とは単なる経済活動ではなく、物を生産する過程で費やされる人々の労働力や命、さらには自然環境そのものをも含む広い概念である。同時に、国際的な文化活動の中で、人々が異なる文化圏に入り込み、生活を共にしながら互いの文化を「消費」することが、新たな創造や交流を生み出す可能性についても考察した。さらに最終回では、「他者」として社会から切り離されがちな受刑者に寄り添う教誨師を招き、人間の尊厳や共存について深く考える機会を設けた。

すべての回で参加者と講師との間に活発な質疑応答が行われ、大学生のみならず、小学生や中学生も参加する世代横断的な研究会となった点も本年度の大きな特徴である。

#### 1) 自然との共存と動物たちのコミュニティ：シロアリに学ぶ

第30回および第33回（2025年9月30日と12月2日）では、シロアリ研究者である林良信氏（法学部専任講師）を迎え、「すごいぞ！シロアリのコミュニティ」「ますますすごいぞ！シロアリの底力」を開催した。林氏は、真社会性昆虫であるシロアリたちが、それぞれ異なる役割を担いながら共同体を形成していく仕組みについて解説した。実際に複数種のシロアリを持参していただき、その生態を間近で観察しながら説明が行われたことで、参加者は生き物たちの個々の在り方を具体的に理解することができた。特に印象的だったのは、小学生たちが次々と鋭い質問を投げかけ、それに大学生たちも刺激を受けていたことである。第二回では、個体ごとの役割の違いが単なる「分断」ではなく、多様性に基づく共存であることが強調され、人間社会を考える上でも示唆に富む内容となった。



#### 2) 国際的な文化活動と文化交流

第31回「ダンスで世界をつなぐ」（2025年10月7日）では、日本とベルリンを拠点に活動する多国籍ダンスチーム MIMIZU を招き、国際的な文化交流について考察した。彼らが重視しているのは、単に作品を創造することではなく、互いの生活圏に入り込み、その土地の日常を共に経験することである。共に食べ、時間を過ごし、生活の感覚を共有することが、創造の基盤となる。研究会では、異文化理解とは知識の交換だけではなく、「生活」を共有する身体的な経験であることが示された。また、本研究会は教養研究センター助成によるワークショップと連動して実施され、参加者たちは自らの身体や日常感覚を持ち寄りながら、新たなコミュニティが形成される過程を体験した。

#### 3) 労働災害と人の命

第32回「得我（拙）くワタシと I do me するわたし」（2025年11月4日）では、榊山美賛氏を迎



え、労働災害と人の命について考えた。榊山氏は、自身が事故により重い障害を負っただけでなく、息子を労働災害で失う経験を通して、消費されてしまう命や労働力の問題を語った。労働の現場では、利益や効率の背後で人の命が失われることがある。しかし、その責任が十分に問われない現実も存在する。榊山氏は、同じ悲しみを抱える人々とのつながりの中で、自ら失われたと思っていた「自分」を再び見つめ直すようになったという。その姿は、コミュニティが単なる支援の場ではなく、人が生き直す場にもなりうることを示していた。

#### 4) 動物の命と消費：野生との共存と消費

第34回(2026年1月27日)は、3年前に第16回目の研究会でお招きした、西伊豆でハンターとして生きる保莉優雅氏を再び招き、「自分の生き方を自分で選ぶ～野生とともに生きる～」を開催した。保莉氏はジビエを通して、人間と野生動物との関係について発信を続けている。野生動物の肉には余分な脂肪が少なく、その身体には自然の中で生き抜いてきた痕跡が刻まれている。保莉氏は、「命をいただく」という行為を通じて、人間が自然とどのように向き合うべきかを考える必要性を語った。また、倫理的な狩猟や命への敬意についての話は、食肉の世界にも見られる非倫理的な大量生産を見直す契機ともなった。

#### 5) 「他者」に寄り添う：教誨師という役割

最終回となる第35回「受刑者の言葉に耳を傾ける～教誨師として生きる～」(2026年2月3日)では、教誨師の田中英真氏を迎えた。英真氏は、教誨師の役割とは論すのでも諫めるのでもなく、相手を丸ごと受け止め、寄り添うことであると語った。受刑者の中には、自分の思いを言葉にできない人や、他者とのつながりを経験してこなかった人も多い。そのような人々に対し、ただ静かに向き合い続けることが重要だという。「犯罪者」とは単なるラベルにすぎず、その裏には自分と同じように一人の苦しみを抱えた人間がいる。その視点は、「正義」とは何か、「共存」とは何かを改めて問い直すものであった。中学生を含む参加者たちも熱心に耳を傾け、活発に質問をしていた。

7年間にわたる研究会を通じて浮かび上がったのは、「共存」とは単なる理想ではなく、異なる他者や自然、さらには苦しみを抱えた存在(それは私たち自身でもある)に向き合い続ける営みであるということである。そして創造力とは、そのような他者との出会いの中からこそ生まれてくるものである。本研究会は活動を通して、世代や立場を超えた対話の場を築き、人間社会の新たな可能性を世代を超えた参加者と探る実践の場でもあった。

(横山千晶)

## 1 慶應義塾大学教養研究センター規程

平成14年7月2日制定

(設置)

第1条 慶應義塾大学（以下、「大学」という。）に、慶應義塾大学教養研究センター（Keio Research Center for the Liberal Arts。以下、「センター」という。）を置く。

(目的)

第2条 センターは、多分野・多領域にまたがる内外の交流・連携に基づく教養研究活動を推進およびこれに関する教育活動を行うことで、知の継承と発展に貢献することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1 教養研究を中心とした知の継承と拡大、発展に資する研究活動
- 2 前号の事業に関する授業科目の設置と教育活動
- 3 教養研究および教育活動に基づく学内外の交流活動の企画、支援
- 4 教養研究および教育活動への助成および支援
- 5 教養研究および教育活動状況の把握と情報の収集および発信
- 6 その他センターの目的達成のために必要な事業

(組織)

第4条 ① センターに次の教職員を置く。

- 1 所長
- 2 副所長 若干名
- 3 所員 若干名
- 4 研究員 若干名
- 5 事務長
- 6 職員 若干名

② 所長は、センターを代表し、その業務を統括する。

③ 副所長は、所長を補佐し、所長に事故あるときはその職務を代行する。

④ 所員は、原則として兼担所員とし、センターの目的達成のために必要な研究および職務に従事する。

⑤ 研究員は、特任教員、研究員（有期）または兼任研究員とし、所長の指示に従い研究に従事する。

⑥ 国内および国外の大学、専門研究機関からの派遣研究者に関しては、別に訪問研究者を置くこと

ができる。

⑦ 事務長は、センターの事務を統括する。

⑧ 職員は、事務長の指示により必要な職務を行う。

(運営委員会)

第5条 ① センターに運営委員会を置く。

② 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 1 所長
- 2 副所長
- 3 事務長
- 4 大学各学部長
- 5 大学各学部日吉主任
- 6 日吉研究室運営委員長
- 7 日吉メディアセンター所長
- 8 日吉 KIC を担当する KIC 所長、もしくは副所長
- 9 体育研究所長
- 10 外国語教育研究センター所長
- 11 自然科学研究教育センター所長
- 12 日吉キャンパス事務長
- 13 その他所長が必要と認めた者

③ 委員の任期は、役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

④ 運営委員会は所長が招集し、その議長となる。

⑤ 運営委員会は、次の事項を審議する。

- 1 センター運営の基本方針に関する事項
- 2 センターの事業計画に関する事項
- 3 研究プログラムに関する事項
- 4 人事に関する事項
- 5 予算・決算に関する事項
- 6 コーディネート・オフィスに関する事項
- 7 その他必要と認める事項

(コーディネート・オフィス)

第6条 ① センターの事業活動を円滑かつ効率的に遂行するために、運営委員会の下にコーディネート・オフィスを置く。

② コーディネート・オフィスは、所長、副所長、事務長およびコーディネーター若干名をもって構成する。コーディネーターは、所長、副所長、事務長とともに、センターの事業を推進する。

③ コーディネート・オフィスは、必要に応じて委員会を置き、センターの事業活動の一部を付託す

ることができる。

(特別委員会)

第7条 運営委員会は、必要に応じて特別委員会を置き、第5条第5項に定める審議事項の一部について審議を付託することができる。

(教職員の任免)

第8条 ① センターの教職員等の任免は、次の各号による。

- 1 所長は、大学評議会の議を経て塾長が任命する。
- 2 副所長、所員および兼任研究員は、所長の推薦に基づき、運営委員会の議を経て塾長が任命する。
- 3 特任教員および研究員（有期）については、「任免規程（就）（昭和27年3月31日制定）」の定めるところによる。
- 4 訪問研究者については、「訪問学者に対する職位規程（昭和51年8月27日制定）」の定めるところによる。
- 5 事務長および職員については、「任免規程（就）（昭和27年3月31日制定）」の定めるところによる。
- 6 コーディネーターは、所員および義塾職員の中から、所長が推薦し、運営委員会が委嘱する。

② 所長、副所長およびコーディネーターの任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

③ 所員の任期は2年とし、重任は妨げない。

④ 兼任研究員の任期は、次条に定める研究プログラムの研究期間とする。

(研究プログラム)

第9条 ① センターに次の研究プログラムを置く。

- 1 基盤研究：専任教員が核となって展開する、教養研究を中心とした共同研究
- 2 一般研究：センターが必要と認めた個人研究または共同研究
- 3 特定研究：センターが企画、立案した研究

② 研究プログラムの企画・募集・選定・管理・統括等の詳細については、運営委員会で別に定める。

(契約)

第10条 ① 外部機関等との契約は、慶應義塾の諸規程等に則り行うものとする。

② 学内機関等との契約は、運営委員会の議を経て所長が行うものとする。

(経理)

第11条 ① センターの経理は、「慶應義塾経理規程（昭和46年2月15日制定）」の定めるところによる。

② センターの経費は、義塾の経費、委託研究資金、国または地方公共団体等からの補助金、寄附金およびその他の収入をもって充てるものとする。

③ 外部資金の取扱い等については、調達会計部の定めるところによる。

(規程の改廃)

第12条 この規程の改廃は、運営委員会の審議に基づき、大学評議会の議を経て塾長が決定する。

附 則

① この規程は、平成14年7月1日から施行する。

② この規程は、施行後3年を目途に見直すものとする。

附 則（平成17年6月3日）

この規程は、平成17年6月3日から施行する。

附 則（平成18年5月9日）

この規程は、平成18年5月9日から施行し、平成18年5月1日から適用する。

附 則（平成20年5月1日）

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則（平成20年11月4日）

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則（平成21年12月15日）

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則（平成23年3月29日）

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則（平成26年12月5日）

この規程は、平成26年4月1日から施行する。

附 則（2020年6月2日）

この規程は、2020年7月1日から施行する。

附 則（2023年9月12日）

この規程は、2023年10月1日から施行する。

附 則（2024年3月29日）

この規程は、2024年3月29日から施行する。

## 2 運営委員会委員

2025年4月1日～2026年3月31日在籍者

第12期（2023年10月1日～2025年9月30日）

第13期（2025年10月1日～2027年9月30日）

教養研究センター担当常任理事

奥田 暁代

教養研究センター所長

片山 杜秀

教養研究センター副所長

高橋 宣也

鈴木 亮子

三原龍太郎

寺沢 和洋

教養研究センター事務長

佐藤 朋

文学部長 佐藤 孝雄

経済学部長 駒形 哲哉（2025年9月30日まで）

河井 啓希（2025年10月1日から）

法学部長 堤林 剣（2025年9月30日まで）

亀井源太郎（2025年10月1日から）

商学部長 牛島 利明（2025年9月30日まで）

佐藤 和（2025年10月1日から）

医学部長 金井 隆典（2025年9月30日まで）

武林 亨（2025年10月1日から）

理工学部長 村上 俊之

総合政策学部長

加茂 具樹

環境情報学部長

一ノ瀬友博

看護医療学部長

野末 聖香（2025年9月30日まで）

永田 智子（2025年10月1日から）

薬学部長 有田 誠

文学部日吉主任

市川 崇

経済学部日吉主任

中野 泰志（2025年9月30日まで）

山本 賀代（2025年10月1日から）

法学部日吉主任

大久保教宏（2025年9月30日まで）

鈴木 透（2025年10月1日から）

商学部日吉主任

段 瑞聡（2025年9月30日まで）

伏見 岳志（2025年10月1日から）

医学部日吉主任

井上 浩義（2025年9月30日まで）

藤猪 英樹（2025年10月1日から）

理工学部日吉主任

小菅 隼人

薬学部日吉主任

大澤 匡範（2025年9月30日まで）

大江 知之（2025年10月1日から）

体育研究所所長

須田 芳正

日吉メディアセンター所長

横山 千晶（2025年9月30日まで）

大出 敦（2025年10月1日から）

KIC 副所長／日吉地区

小林 宏充（2025年9月30日まで）

KIC 所長／日吉地区

小林 宏充（2025年10月1日から）

外国語教育研究センター所長

山下 一夫

自然科学研究教育センター所長

岡本 昌樹

日吉研究室運営委員会委員長

荒畑 靖宏

日吉キャンパス事務長

繁森 隆（2025年10月31日まで）

金子 康樹（2025年11月1日から）

日吉学生部事務長

渡部 隆志

日吉メディアセンター事務長

関口 素子（2025年10月31日まで）

河越 太郎（2025年11月1日から）

日吉キャンパス事務センター課長

町出 夏樹

日吉行事企画委員会（HAPP）委員長

石井 明

日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長

寺沢 和洋



### 3 組織構成員

2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日

所 員：188 名（2026 年 3 月 31 日現在）

所 長：片山杜秀（法）

副所長：高橋宣也（文）

鈴木亮子（経）

三原龍太郎（経）

寺沢和洋（医）

コーディネーター：

市川 崇（文）、徳永聡子（文）、西尾宇広（文）、

若澤佑典（文）、石井 明（経）、新島 進（経）、

大出 敦（法）、種村和史（商）、荒金直人（理）、

見上公一（理）、高田眞吾（理）、

神武直彦（SDM 研究科）、

繁森 隆（日吉キャンパス事務長・2025 年 10 月 31 日まで）、

金子康樹（日吉キャンパス事務長・2025 年 11 月 1 日から）、

佐藤 朋（教養セ事務長）

広報担当：高橋宣也（文）

日吉行事企画委員会（HAPP）

委員長：石井 明（経）

委員：高橋宣也（文）、津田眞弓（経）、大出 敦（法）、

竹内美佳子（商）、小菅隼人（理）、小林拓也（理）、

石手 靖（体研）、松本可愛（保セ）、

繁森 隆（日吉キャンパス事務長・2025 年 10 月 31 日まで）、

金子康樹（日吉キャンパス事務長・2025 年 11 月 1 日から）、

町出夏樹（運営サ）、中園裕子（運営サ）、

中尾悠乃（日吉学生部・2025 年 8 月 31 日まで）、

柳井陸志（日吉学生部・2025 年 9 月 1 日から）、

関口素子（日吉メディアセ・2025 年 10 月 31 日まで）、

河越太郎（日吉メディアセ・2025 年 11 月 1 日から）、

吉沢亜季子（日吉メディアセ）、

富田いづみ（教養セ・2025 年 5 月 31 日まで）、

菊地啓子（教養セ・2025 年 6 月 1 日から）

日吉キャンパス公開講座運営委員会

委員長：寺沢和洋（医）

委員：高橋宣也（文）、有川智己（経）、石井 明（経）、

酒井規史（商）、小菅隼人（理）、池田眞弓（理）、

神武直彦（SDM 研究科）、村松 憲（体研）、

繁森 隆（日吉キャンパス事務長・2025 年 10 月 31 日まで）

金子康樹（日吉キャンパス事務長・2025 年 11 月 1 日から）

庄内セミナー実行委員会

委員長：鈴木亮子（経）

委員：高橋宣也（文）、糟谷大河（経）、片山杜秀（法）、

小菅隼人（理）、鳥海奈都子（塾高）、

古川晴彦（塾高・2025 年 11 月 30 日まで）

小佐野弾寄附講座「アカデミック・スキルズ」運営委員会

委員長：片山杜秀（法）

委員：高橋宣也（文）、鈴木亮子（経）、三原龍太郎（経）、

寺沢和洋（医）

「生命の教養学」企画委員会（2025 年 12 月 1 日から）

委員長：石川 学（商）

委員：西尾宇広（文）、有川智己（経）、三原龍太郎（経）、

林 秀光（法）、川上了史（理）、見上公一（理）

（株）コーエーテクモホールディングス寄附講座「日吉学」運営委員会

委員長：片山杜秀（法）

委員：高橋宣也（文）、鈴木亮子（経）、三原龍太郎（経）、

寺沢和洋（医）、大出 敦（法）

「日吉学」企画委員会

委員長：大出 敦（法）

委員：高橋宣也（文）、安藤広道（文）、有川智己（経）、

片山杜秀（法）、阿久澤武史（塾高）、杵島正洋（塾高）、

高橋 傑（普通部・2025 年 10 月 1 日から）、

都倉武之（福澤研究セ）

（株）コーエーテクモホールディングス寄附講座「ゲーム学」運営委員会

委員長：片山杜秀（法）

委員：高橋宣也（文）、鈴木亮子（経）、三原龍太郎（経）、

寺沢和洋（医）、新島 進（経）

「ゲーム学」企画委員会

委員長：新島 進（経）

委員：三原龍太郎（経）、山下一夫（理）

（株）アカツキ寄附講座「エンターテインメントビジネス論」運営委員会

委員長：片山杜秀（法）

委員：高橋宣也（文）、鈴木亮子（経）、三原龍太郎（経）、

寺沢和洋（医）

「エンターテインメントビジネス論」企画委員会

委員長：三原龍太郎（経）

委員：吉川龍生（経）、山下一夫（理）

アーチ（株）寄附講座「エンターテインメントビジネス論」企画委員会

委員長：三原龍太郎（経）

委員：吉川龍生（経）、山下一夫（理）

SMBC グループ寄附講座「金融リテラシー入門」

運営委員会

委員長：片山杜秀（法）

委員：高橋宣也（文）、鈴木亮子（経）、三原龍太郎（経）、  
寺沢和洋（医）

「金融リテラシー入門」企画委員会

委員長：片山杜秀（法）

委員：寺沢和洋（医）

教養研究センター事務局

佐藤 朋、池本晶子、高橋裕美、  
富田いづみ（2025年5月31日まで）、  
菊地啓子（2025年6月1日から）

## 4 2025年度の主な活動記録・予定

| Date |           | Events                                                          |
|------|-----------|-----------------------------------------------------------------|
| 4    | 2日        | 教養研究センター設置科目ガイダンス                                               |
|      | 14日～7月25日 | 「学び場」プロジェクト 春学期活動                                               |
|      | 16日       | 情報の教養学 第1回：福井健策「わたしの声はわたしのもの？わたしの顔はわたしのもの？～デジタルレプリカの法律学入門」      |
|      | 21日       | 第1回コーディネート・オフィス会議                                               |
|      | 26日       | 学会・ワークショップ等開催支援 鳥の詩学シンポジウム                                      |
|      | 28日       | 第1回所長・副所長会議                                                     |
|      | 30日       | 第1回運営委員会                                                        |
|      | 30日       | 読書会 晴読雨読⑭「アイデアの系譜学『思考のリズム感覚、論理のスタートダッシュ』」                       |
|      |           |                                                                 |
|      |           |                                                                 |
| 5    | 10日       | HAPP企画 新入生歓迎行事 福澤諭吉と北里柴三郎—近代史上の慶應医学部—                           |
|      | 11日       | 学会・ワークショップ等開催支援 刊行記念ブックトーク「近代イギリスの動物史 歴史学のアニマル・ターン」             |
|      | 14日       | 情報の教養学 第2回：太田雅文「TODによるサステナブルな田園都市」                              |
|      | 14日       | 学会・ワークショップ等開催支援 公開シンポジウム「現代ベトナムを知る」                             |
|      | 14日、16日   | HAPP企画 ライブラリーコンサート 2025 春                                       |
|      | 18日       | 学会・ワークショップ等開催支援 フランスにおけるマグレブ系「移民」映画『シャアバの子供』上映会・作家アズーズ・ベガークとの対談 |
|      | 21日       | HAPP企画 新入生歓迎行事 今貂子舞踏公演『彗星』                                      |
|      | 24日       | 基盤研究 文理連接プロジェクト第1回 ゲスト講演1「日本における人工妊娠中絶の歴史と現状：過去、現在、そして未来へ」 富岡薫  |
|      | 26日       | 第2回所長・副所長会議                                                     |
|      | 30日       | 読書会 晴読雨読⑮「アイデアの系譜学『鳥たちの来襲？ 歌声・かたち・移動』」                          |
|      | 31日       | 学会・ワークショップ等開催支援 第9回総合危機管理学会学術大会                                 |
|      |           |                                                                 |
| 6    | 4日        | 基盤研究 教養研究講演会 no.11 オウム真理教事件を通じて現代社会を見る—「抑圧されたもの」の回帰のように         |
|      | 10日       | 第3回所長・副所長会議                                                     |
|      | 14日       | みなさん mirai プロジェクト 南三陸の森を知る講演会（福澤育林友の会主催）                        |
|      | 15日       | 学会・ワークショップ等開催支援 観想研究ワークショップ・シリーズ「なる」のオートエスノグラフィー                |
|      | 16日       | 第2回コーディネート・オフィス会議                                               |
|      | 28日       | 基盤研究 文理連接プロジェクト第2回 ゲスト講演2「ネットワーク：自然と人工のインタラクション」 金子晋丈           |
|      |           |                                                                 |
| 7    | 5日        | HRP2025 一踊る日吉キャンパス—                                             |
|      | 9日        | 情報の教養学 第3回：伊藤公平「慶應義塾で学ぶということ」                                   |
|      | 12日       | HAPP企画 日吉音楽祭 2025                                               |
|      | 13日       | HAPP企画 古楽アカデミー・室内アンサンブル演奏会《バロック後期のドイツ室内楽作品》                     |
|      | 16日       | 読書会 晴読雨読⑯「アイデアの系譜学『熱帯的感受性 ムシムシの彼岸にある言葉たち』」                      |
|      | 19日       | 基盤研究 文理連接プロジェクト第3回 「人工」についての論考の計画発表                             |
|      | 19日、20日   | 学会・ワークショップ等開催支援 第33回日本経営倫理学会全国研究発表大会シンポジウム                      |
| 8    | 22日       | 第4回所長・副所長会議                                                     |
|      | 1日        | 第3回コーディネート・オフィス会議                                               |
|      | 7日        | 読書会 晴読雨読⑰「アイデアの系譜学『弱音の効用 フラジャイルなものの愛で方・接し方』」                    |
| 9    | 8日～11日    | みなさん mirai プロジェクト 南三陸合宿                                         |
|      | 29日～9月1日  | 庄内セミナー                                                          |
| 9    | 5日        | 第2回運営委員会                                                        |
|      | 26日       | 第5回所長・副所長会議                                                     |
|      | 29日       | みなさん mirai プロジェクト 2025年度 活動報告会 —キャンパスで、現場へいくことの意味を考えよう—         |
|      | 30日       | 創造力とコミュニティ研究会 すごいぞ！シロアリのコミュニティ                                  |
|      |           |                                                                 |

|    |                                                                                                                                     |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 10 | 1日、22日、29日、<br>11月12日、12月10<br>日、2026年1月7日、<br>14日<br>4日、25日、11月8日、<br>15日、29日<br>4日<br>13日～1月23日<br>7日<br>12日<br>20日<br>22日<br>28日 | 実験授業「エンターテインメントビジネス特論」<br><br>日吉キャンパス公開講座<br><br>基盤研究 文理接続プロジェクト第4回 「人工」についての論考の中間発表1<br>「学び場」プロジェクト 秋学期活動<br>学会・ワークショップ等開催支援 チーム MIMIZU 来日メンバーによる身体ワーク<br>ショップ「私の身体と記憶をつなぐ」<br>古楽アカデミー・オーケストラ・小合唱／ヴェルニグローデ放送合唱団青年部（ドイ<br>ツ）との合同・交流演奏会<br>第6回所長・副所長会議<br>情報の教養学 第4回：山中祥太「使いやすいユーザインタフェースのデザインを理論<br>的に研究する」<br>創造力とコミュニティ研究会 ダンスで世界をつなく 東京⇄ベルリンパフォーマンス<br>プロジェクト チーム MIMIZU の挑戦                                                                                                                                                                                                                                 |
| 11 | 4日<br>5日<br>12日<br>14日<br>17日<br>19日                                                                                                | 創造力とコミュニティ研究会 得我（拙）くワタシと I do me するわたし ～命の伝<br>道師を目指す、新しい自分探しと自己選択の軌跡～<br>情報の教養学 第5回：山本龍彦「AI×アテンション・エコノミーと人間の尊厳<br>——SNSはあなたを幸福にしていますか？——」<br>読書会 晴読雨読⑱「アイデアの系譜学『お悩み相談の機微 マジメとユカイの間で泳<br>ぐ』」<br>第4回コーディネート・オフィス会議<br>第3回運営委員会<br>学会・ワークショップ等開催支援 国際シンポジウム：ウクライナの文化と教育—最前<br>線からの報告                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 12 | 2日<br>3日<br>4日<br>5日<br>6日<br><br>6日<br>8日<br>8日～10日<br>12日<br>15日～19日<br>23日                                                       | 創造力とコミュニティ研究会 シロアリ企画第2弾 ますますすごいぞ！シロアリの底<br>力<br>情報の教養学 第6回：高道慎之介「音のAIを知り人間を知ろう」<br>読書会 晴読雨読⑲「アイデアの系譜学『＜問合い＞の研究 感じる近さと思考の遠さ』」<br>HAPP 企画 新入生歓迎行事 ジェンダーレスなインプレッションメイク<br>学会・ワークショップ等開催支援 慶應義塾大学体育研究所・公社）全国大学体育連合<br>関東支部共催ワークショップ「ルーブリック作成と活用を考える ワークショップ &<br>ディスカッション」<br>基盤研究 文理接続プロジェクト第5回 「人工」についての論考の中間発表2<br>第7回所長・副所長会議<br>学会・ワークショップ等開催支援 Analytic Number Theory and Special Functions<br>HAPP 企画 新入生歓迎企画／教養の一貫教育 Vol.11「永井荷風文学賞リレー講演会」I<br>田中純氏×松浦寿輝氏×朝吹亮二氏<br>学会・ワークショップ等開催支援 日吉キャンパスにえがく夢 —第五校舎跡地から考<br>える持続可能なキャンパスライフ— 展覧会『憩いの場・日吉展』／シンポジウム<br>『憩いの場・日吉』<br>読書会 晴読雨読⑳「アイデアの系譜学『語学愛!! あるいは学びへの憎しみ?』」 |
| 1  | 7日<br>10日<br>19日<br>21日<br><br>27日<br>29日<br>30日                                                                                    | コレギウム・ムジクム・オーケストラ演奏会<br>古楽アカデミー・オーケストラ・小合唱演奏会<br>第8回所長・副所長会議<br>HAPP 企画 「新人Hソケリッサ！ことぶき多世代プロジェクト」SUPER STRANGER<br>新人Hソケリッサ！慶應義塾大学パフォーマンス<br>創造力とコミュニティ研究会 自分の生き方を自分で選ぶ～野生とともに生きる～<br>第9回所長・副所長会議<br>読書会 晴読雨読㉑「アイデアの系譜学『動く・浮かぶ・静止する—体育からデザインに<br>いたる身体感覚—』」                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| 2  | 2日<br>3日<br>6日<br>27日<br>28日                                                                                                        | 最終講義 横山千晶教授「存在の耐えられない軽さの跡を残す」<br>創造力とコミュニティ研究会 受刑者の言葉に耳を傾ける～教誨師として生きる～<br>アカデミック・スキルズ プレゼンテーションコンペティション<br>第5回コーディネート・オフィス会議<br>基盤研究 文理接続プロジェクト第6回 「人工」についての論考の最終発表                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| 3  | 5日<br>25日<br><br>27日                                                                                                                | 第4回運営委員会<br>学会・ワークショップ等開催支援 戦争記憶研究会第3回シンポジウム 戦争記憶の<br>ギャップを乗り越える<br>第10回所長・副所長会議                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |



---

慶應義塾大学教養研究センター  
2025年度 活動報告書

---

2026年8月31日発行  
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター  
代表者 片山杜秀  
〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1  
TEL 045-566-1151  
<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>  
印刷・製本 サンパートナーズ(株)

---



**慶應義塾大学教養研究センター**  
Keio Research Center for the Liberal Arts